2015

千里の市民活動のはじまりの物語

～コラボの歴史を振り返ってこれからの活動を考えよう～

第 11 回千里文化センターフォーラム

〇詳細内容

日　時　：　平成２７年８月29日（土）

　　１４：００～１６：００

場　所　：　千里文化センター「コラボ」２階　多目的ホール

テーマ　：　千里の市民活動のはじまりの物語

参加者　：　約60人

基調講演：　松村（まつむら）　暢彦（のぶひこ）先生

「市民活動のはじまりの物語の共有はなぜ必要なのか」

ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ：　千里ニュータウン内で色々な活動をされている方々と、

今までの活動を踏まえた今後の市民活動について討論します

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：松村（まつむら）　暢彦（のぶひこ）先生

（愛媛大学教授　元豊中市千里文化センター市民運営会議会長）

ﾊﾟﾈﾗｰ：赤井（あかい）　直（すなお）さん（元豊中市千里文化センター市民実行委員）

奥居（おくい）　武（たけし）さん（ニュータウン育ち・ニュータウン研究家）

片岡（かたおか）　誠（まこと）さん（千里市民フォーラム事務局長）

加福（かふく）　共之（ともゆき）さん（元豊中市千里文化センター市民実行委員）

水木（みずき）　千代美（ちよみ）さん（佐竹台スマイルプロジェクト代表）

森（もり）　由香（ゆか）さん（元豊中市千里文化センター市民運営会議委員）

（50音順）

開会（司会：吹田市　栗本さん　　挨拶：豊中市　上野山課長）

司会	お待たせいたしました。ただいまから第 11 回千里文化センターフォーラムを開催い本日の司会進行を担当させていただきます、吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議の栗本と申します。よろしくお願いいたします。 講演に入ります前に、お手元の資料の確認をさせていただきます。 ・フォーラムのチラシ ・資料「吹田市と豊中市の市民活動年表」 ・豊中市千里文化センター市民実行委員会活動紹介 ・とよなか市民活動ネットきずな　ニュースレター 「いろいろえんぴつ」、 裏面「豊中市千里文化センター市民実行委員会諸活動の座・ポジション」 ・佐竹んち通信　vol.30　8 月号 以上 5 点、お手元にお揃いでしょうか。 それでは、豊中市千里ニュータウン再生推進課の上野山課長よりご挨拶を申し上げ しくお願いします。
豊中市 上野山課長	みなさん、こんにちは。本日は、第 11 回千里文化センターフォーラム『千里の市民活動のはじまりの物語』に多数のご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。私、先ほどご紹介いただきました、豊中市千里ニュータウン再生推進課の上野山と申します。よろしくお願いいたします。 吹田市と豊中市にまたがる千里ニュータウンは、まち開きから 50 年余りが経ちますが、その間、多くの市民活動が盛んに行われており、この地域の特色となっております。 本日のフォーラムは、その市民活動をテーマに、吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議と千里地域連携センターとが共同で、千里の市民活動の拠点のひとつであるこのコラボにおいて、第 11 回の「千里文化センターフォーラム」として開催することになりました。 吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議と申しますのは、千里ニュータウンの再生に向け、吹田市と豊中市がそれぞれの行政区域を越えて、千里ニュータウンに関する情報交換や、両市共同でのニュータウン再生のための事業に取り組むことなどを目的として活動をしております。 今回のフォーラムでは、市民活動のこれまでを振り返りながら、活動に携わられておられる方々に、その想いや今までの活動の様子をお話しいただき、今後の市民活動を考えること、そしてより多くのみなさまに知っていただくことで、新たな活動のスタートにつながればと考えております。 本日ご講演いただきます、愛媛大学教授の松村暢彦先生は、元豊中市千里文化センター市民運営会議の会長で、コラボの運営に深く関わって来られており、そのご経験を踏まえ、「千里の市民活動のはじまりの物語」をテーマにお話しいただきます。

	 　また、第 2 部のパネルディスカッションには、吹田市・豊中市でそれぞれの市民活動の立ち上げに携わってきた方に、パネラーとしてお集まりいただいており、体験された方から直接ですね、市民活動のスタートのきっかけや経緯を語っていただき、今後の市民活動についてご議論いただく予定となっております。 　このフォーラムが、千里ニュータウン地域の市民活動のさらなる発展の一助となればと思っております。本日は、よろしくお願いいたします。
司会	ありがとうございました。 それでは、基調講演としまして「市民活動のはじまりの物語の共有はなぜ必要なのか」と題し、愛媛大学教授松村暢彦先生にお話しいただきたいと思います。 それでは、松村先生よろしくお願いいたします。

基調講演：松村暢彦先生

松村先生	こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、松村と申します。 今日ですね、基調講演というほどのものではないですが、みなさんに少しだけお話をさせていただきたいと思います。 このフォーラムのタイトル「千里の市民活動のはじまりの物語」、ここで、基調講演で私がしゃべるとなると、おそらくみなさんは、千里の市民活動のアダムとイブを探す、というような話が聞けると思うかもしれません。しかしその話は、僕はできません。というのは、市民の方々が、日本国内で考えてもかなり初期から活動されている方々ですので、その話は置いておきます。その話は、パネルディスカッションの中でしていただくつもりです。 私のほうからは、市民活動のはじまりの物語をみなさんと共有することは何で必要なのか、ということについて共有したいと思っています。そのつもりで準備しようと、この一週間ぐらい、よくよくいろいろ考えてきたのですが、結局「自明やな。」という気もします。たとえば、みなさんの大切な方を考えていただいて、その大切な方が生まれた日、誕生日ですよね。それは大切でしょう、っていう話ですね。実はうちの家内が昨日誕生日だったのですが、大切かどうかはちょっと置いておいて、「やっぱり大切なんかな。」と思ったんですよね。「市民活動が大切なのであるならば、その市民活動の最初というのはやっぱり社会において大切なんだ。」と、それだけの話です。 僕の話はこれで終わってしまってもいいんですけれども、これで終わってしまうと僕の基調講演の役割が全くなくなってしまうので、少しだけ理屈をこねたいと思います。 理屈に入る前に、私、土木工学科の出身でして、昨年愛媛大学のほうに移ったのですが、愛媛大学でも、土木の学生に、まちづくりの話をします。その時に出すスライドを持ってきました。これみなさん分かりますか。トイストーリー３ですね。たいてい１、２、３といくとだんだんランクが落ちるのですが、トイストーリーだけは、１、２、３と、３のために１，２があったのではないかと思うぐらい、素晴らしい映画だと思います。私自身もよく映画館に行くのですが、この映画を見たときも一人で行って、まわりはファミリーで来ていたのですが、40 超えたオッチャンが一人（私）で、映画館で泣いていました。これどういう話かというと、主人公がこのウッディー人形を手渡すんですね。主人公は、１、２は小さいころで、ウッディー人形と一緒に遊んでいたんですけれども、３になって大学生になって、このウッディー人形と遊ぶことがなくなって、この人形を必要な子に渡そうということになりました。映画の最後のほうに、このスライドの上の右の女の子に、「ウッディーはこんな子でね・・・」と語りながら、ウッディー人形が必要な子に手渡されていくという、そんな場面なんですね。 土木の学生にとって、まちづくりってたぶんこうなんだと思うんですよね。ウッディー人形にあたるものがまちそのもの。公園であったり、道路、バス、そういう、いろんなも

のを次の世代に渡していく。そういう仕事がまちづくりで、そういうことに関われるみなさんはとっても幸せなんですよ、という話を授業の最初のほうにします。NPO なり市民活動なり、住民活動はたぶんこういうことなんだろうと思うんです。ウッディー人形が、今まで僕が話してきたのはハードのシステムの話になるんですけど、それだけじゃなくて、社会全体で考えたときに、市民の活動もこういうウッディー人形みたいになるんじゃないかなと思います。

そもそも、市民活動が何でこんなに最近、増えてきたというか、必要になってきたのか、期待されているのか、というようなことです。産業化以前ですね、日本でいうと高度経済成長期以前ですね、縦軸に市場性、横軸に「公」「共」「私」と書いてあります。縦軸の方は上に行けばいくほど儲かる仕事、下の方は儲からない仕事。「私」というのはわたくしの話なのでプライベートな話、「公」のところは行政的なところですね。その真ん中のところが「地域」、そんなイメージです。

昔はどうだったかというと、従来型のコミュニティーが広範なところをカバーできていた。葬式なんかも、地域で出す。私のおばあちゃんが亡くなった時には、鳥取だったのですが、地域のおばあちゃん連中が、集まってきておにぎりを作ってくれて、喪主である私の父親はちょこんと座っているだけで、あとは、地域のおじいちゃんおばあちゃんが全部してくれて。「お寺に戒名でなんぼ包みなさい。」という話も地域のドンというか、よくご存じのおばあちゃんが喪主の私の父親に、なんぼくらいという話を全部してくれるというような感じですね。

民間の企業も当然ありましたし、行政もあった、という形でだいたいカバーできていました。今の時代になってくると、どうしても地域の力が落ちてくるということです。さっき私の祖母の話をしましたが、その 15 年後ぐらいに、祖父の方が亡くなったんですが、その時にはもう、そういう組織が完全になくなっていて、セレモニーホールでお葬式をあげました。それはそれで、つつがなく終わっていくのですが、じゃあ、昔のことを知っている人間としては、すごくさみしかったんですね。そのおじいちゃんが亡くなった時には、「地域の人があんまり来てくれなかったな」と思いながらさみしい思いをしたのを覚えています。私がちょうど中学校の時の話です。

そんなこともありながら、企業の活動が活発になってきて、少々の儲けなら入ってくるということもあるでしょうし、政府の方も拡大していく、介護保険等で、お金を集めていろんなサービスを提供していくという形になったのですが、どうしても間が抜けていく。そういうところに住民活動が生まれてくる。そういうところをカバーしていくために、市民の活動が盛んになってきたということだろうと思います。

そういう市民の活動があった時に、ハンナ・アーレントという哲学者、このおばさんといいますか、この女性が、「人間はそれ自らが、始まりである」、非常にいい言葉だと僕は思うのですが、この言葉の意味は 2 つあって、一つは、単純に人間は生まれるということ自体に意味がある、生誕ということに意味があります。

それともう一つは、活動のはじまりという意味です。彼女が社会の人間のいろんな活動を大きく３つに分けたんです。その一つは自分の生命を維持するような活動、食事などですね。そういうものと、仕事、実際にモノを作る、私が最初に出したようなハードのまちを作るというような仕事という部分と。もう一つが、今話題になっている、市民活動という部分です。この市民活動というのが、この社会を継続させていく。非常に重要であるということを彼女はずっと言っています。生命の維持というのであれば、当然自分は死にたくないのでずっと続いていく。モノということでも、行政で、経済で回っていく。ただし、市民の活動というのは複数の人間がいて、コミュニケーションがないと続かない、というようなことで、市民の「活動」といいますが、その「活動」自体がとてもとても重要なんですよ、ということを彼女は言っています。

ただ人間は命があります。寿命があるので、それを継続していかないといけない。社会というのは、結局は駅伝という感じがします。駅伝で、誰かがつないでいかないといけない。自分が死ぬというか、自分が活動を終えるときに、次の人に活動をつないでいくというところで、この世の中というのはずっとつながっていくというものです。こういうものがなければ、完全に根無し草になってしまって、それが、政府や民間にいいようにされてしまって、この社会自身が、死滅してしまう、というようなニュアンスで話を展開されます。

現在市民活動をテーマにこういうシンポジウムやフォーラムをすると、今こういうことをやっていますというような活動内容の話を展開するのが、普通だと思うんですよね。「こんな活動をしている人が、たくさんいらっしゃる、こんなことをしている、あんなことをしている」というような情報提供をするということは、とっても大切です。大切だとは思うのですが、今日のこのフォーラムはそれだけではなくて、「始まりを考えようと、始まりを考えよう。みなさんが非常に活躍されているような始まりのところを考えよう」そこを共有したいのです。その一つの理由というのは、最初のご挨拶にあったように、将来の活動をする人を増やしていきたい。活動のきっかけを話すことで、「この人も、こんな思いから活動を始めたんだな、それやったら自分にもできそうだな」というそういうような活動をやっていく人を増やしていきたい、というのが、一つの大きな意味合いがあると思います。

それと同時に、過去、現在、未来という時間軸を与えます。私の専門は計画です。土木計画、都市計画、地域計画、〇〇計画ということをやっているのですが、最近の計画で、まずいと思うのは、過去のことをあんまり考えずに、将来のことを、「あーでもない、こうでもない」と議論するというのが非常に多いんですね。過去から現在にどうなってきたのか、その延長上でダメなのかいいのか。そこの判断をしたうえで、将来はこうあるべきだ、というのが計画のはずなのに、未来のことだけを考えて、「あんなんしたい、こんなんしたい」という話ですね。基本は、過去のことを知ったうえで、現在、そしてその未来というのを考えていくのがいいんじゃないかな思っています。これが２つめです。

それともう一つ、これが最大なのですが、根っこですね、活動の根っこを再確認するということです。先ほど少し根無し草の話をしましたが、自分の過去をきっちり考えることはとても大切なことなんです。僕もそうです、僕も大学に残った理由というのがあって、それを振り返って自分はああいうことを思って今があるんだなということを再確認する作

業がいるなという。ここの根っこというのを確認するために、今日は様々なみなさんの活動のきっかけのはじまりの物語をお話しいただきたい、というようなことを思います。

３点ですね、１つは、未来の活動者を増やすため、もう一つは、過去、現在、未来というベクトルの中で考えるような視野を持ちたい、それともう一つは、活動の根っこを共有したい、そういうようなことで、今日は、わざわざはじまりの物語というようなことを、シンポジウムといいますか、フォーラムのテーマにしているというようなことです。

この始まりというと、昔の研究で恐縮なのですが、川西のニュータウンで、大学生と一緒にやったものです。その当時大和団地というニュータウンで、行政の方々に地域の歴史の話をしようとすると、ニュータウンなので歴史はそんなにないですよねっていう話をされたんですよね。どうしても、川西の南部の方の旧集落のところは歴史があって、ニュータウンのところは歴史が浅い、という話を多くの方がされます。僕から考えると「そんなことはないでしょう」と思います。ニュータウンにしたって、４０年、５０年、６０年と歴史の蓄積があるじゃないですか、そこを評価しないといけないと思いまして、地域の方々と一緒に、地域の根っこといいますか、始まりのところを、みなさんと共有したいというようなところで、その地域のはじまりのいろいろな思い出を集めてみようということを研究室の学生たちと一緒にしました。この写真は地域の運動会のところで、地域の始まりはありますか、という話でずっと集めています。ワークショップをしながら集めたりですとか、アンケートをして集めたりとかしながら作ったものが、これ、ディスカバー大和というリーフレットです。左の表紙の写真は、これは造成中にですね、もともとラジオ体操の場所だったので造成中のところを使ってラジオ体操をしていた写真をたまたま地域の方がお持ちで、それをお借りした写真。どんなものがあったかというと、例えば、「平木谷公園で、息子が３０年前に大和に引っ越してきた翌日、平木谷公園に遊びに行き、迷子になり、その息子も３３歳になり、来年結婚します。」まあなんてことない話です。こういうような話を共有していくと、どんな効果があったのかということを、若干研究的な話になるのですが、単純に二回アンケートをして、右側の方が千里のディスカバーをお配りして、この２つの赤い部分と青い部分を比較しましょう、ということをしました。

そうすると、単純に２回アンケートをした方々は、ニュータウンに対するような思いはあんまり変わらない、当然ですけど。ただし、昔の話をちゃんと共有するだけで１つは親しみが変わってくる。「自分の街にも歴史結構あるんや」とか、それから郷土という意味合いでも、「わが町も郷土なんだ」というふうに、故郷というようなことを感じてもらえるような方々が増えたということと、「結構交流ってされてるんだな」という話ですね。自分だけの話ではなくて、周りの方々もそういうような思い出であったり、昔あったようなお話を聞くと、「そういうこともあるんかな」ということで、自分たちの街を好きになる、こういうようなことがみられる、昔々の思い最初の方の思いというのを共有することによって、今の方々の思いが変わっていくというような話です。こういうようなことをす

	ることで新たに活動していくような人たちが増えたらいいなということを研究の落ちにしています。 NPO の話でいうと、ここコラボですね、豊中市千里文化センター、市民運営会議ですね。私が、会長だったという話をしていただきましたが、まあはっきり言いまして、途中参加に近いです。この市民運営会議の前に長い長い物語があるんです。 今みなさんが座っている空間ができるような話は、市民運営会議ができたからできたという話ではなくて、その前に長い長い話があってですね、その空間ができたときにどう運営していきましょうかという話で市民運営会議を作っていただいて、たまたま僕がその時お話があって、そこの司会進行役に入ったという話です。じゃあその初年度、何をやったかというと、このコラボ事業ですね。この中のコラボ事業はどうあるべきなのか、という話をしていきました。その時に、ここができる前の話をご存じの方から話を伺って、そのみなさんが大切にされているものを、そのコラボ事業の目的にしたいというようなことから始まりました。どういうような理念なり、どういうことを目指して、ここの事業を展開していこうか、というところを共有するところから始まりました。その最初の物語を尊重しながら決めていったということですね。それを集約したら「多世代・多分野・多文化の共生」です。これにあうようなものであれば、いろんな事業をやっていきましょう、これに合わないのであればちょっと待って、ということで判断していきましょう、ということで、この組織が出来上がったということです。 いろんな組織に目的はありますが、やはり理念というのは変えられない。経営方針は変えられるけれども、理念は変えられません。社長が変われば経営方針は変えられるけれども、経営理念は変えられない。コラボのここの空間もそうです。この下に小さな字で書いてあるんですけど、経営方針に相当するものです。ここというのはその時の時代であったりとか、社会の雰囲気によって変わっていくと思うのですが、ただ、ここのセンターが目指すところは、「多世代・多分野・多文化の共生」という、これは変わらないものだということを示しています。これは昔のはじまりの物語を尊重して決めていったというようなことです。 これで、スライドは終わりますけれども、その昔の、前の話をこれからのパネルディスカッションでお伺いしながら、始まりの物語を共有することが大切なんだな、ということをみなさんと共有できたらうれしいなと思います。 それではそろそろ時間になりましたので、これで私の話は終わりたいと思います。 ありがとうございました。
司会	松村先生ありがとうございました。ご質問につきましては、パネルディスカッションの後にお時間を設けておりますので、その際にお願いいたします。 ただいまからパネルディスカッションの準備をいたしますので、5 分ほど休憩を挟みます。 （休憩）

パネルディスカッション

司会	お待たせいたしました。準備が整いましたので、パネルディスカッションをはじめさせていただきます。 パネルディスカッションにつきましては、ご講演いただいた松村先生をコーディネーターとして、進めていただきます。それではよろしくお願いいたします。
松村先生	はい。それでは今からパネルディスカッションを始めさせていただきます。なかなか斬新なパネルディスカッションですね。非常に緊張します。 それでは改めまして自己紹介させていただきます。愛媛大学の松村暢彦です。よろしくお願いします。 それではパネラーのみなさんをご紹介させていただきたいと思います。 手前の方から、 元豊中市千里文化センター市民実行委員の赤井　直さん 続いて、同じく 元豊中市千里文化センター市民実行委員の加福　共之さん 続きまして、 元豊中市千里文化センター市民運営会議委員の森　由香さん それでは、みなさんから向かって左側になります。手前の方から、 千里市民フォーラム事務局長の片岡　誠さん そして、 ニュータウン育ち・ニュータウン研究家の奥居　武さん 佐竹台スマイルプロジェクト代表の水木　千代美さんです。 以上の方で進めていきたいと思います。 今簡単に自己紹介といいますか、紹介をさせていただきましたが、最初にそれぞれの方々が、どんな市民活動をされているのかについて、ごく簡単に 2 分から 3 分ぐらいでお話をいただいて、そのあとに始まりの物語を十分にお話いただこうかなと思いますので、まずは赤井さんのほうからお願いします。
赤井さん	座ったままで失礼します。 市民活動のはじまりというのは、すごい古いですので、ニュータウンに関わり始めたのは、街角広場というところで、カフェをやっておりました。これはどういうことかといいますと 2001 年 9 月 30 日に近隣センターの空き店舗ですね、シャッター状態になっていた近隣センターの空き店舗の一角を利用しまして、元はといいますと、その前にあった、歩いて暮らせるまちづくりから、豊中市として、社会実験として、オープンしたカフェです。それがずっとやって、半年間の社会実験の期間が終わって、そのあとどうするかと考えた時に、地域の方々から、このカフェをそのままずっと続けてほしいという要望がたく

	さんありましたので、改めて市民で運営していこうという形で、やってきました。それが、今年で15年目になります。15年、まだ今でもひがしまち街角広場を近隣センターの一角で、やっております。そこから発生して、今度コラボができるときに、コラボができる前の歴史は多々ありましたけれども、コラボができたときに、この多目的スペースと、やっぱり、このコラボのカフェがあって、コラボに来て、いろんなことをした人、する人、その人たちのホワイエ的な場所に、この場所がなればいいなと思いましてこの多目的スペースを確保して、それで今に至っています。私はそこで運営委員としてもそうですし、ここのカフェもずっとお手伝いさせていただいて、今日に至っております。 　現在は一番私が足しげく通っているのは、豊中市でやっております、豊中の子ども教室です。地域の子どもを相手に、いろんなことをして、いわゆる、学校の空いた時間にいろんなことをして、子どもたちと遊びましょうというのが、これも11年目に入っておりますが、子どもたちと一緒にだいたい月に6回ぐらい実施して、その準備やなんやで、相当の時間は費やしますけれども、子どもたちと遊ぶというか、そういう時間が主な時間になっております。以上です。
松村先生	はい。ありがとうございました。本当に千里の市民活動に長くかかわってきておられて、私も大阪大学で、まだ地域の話をあんまり知らない時から、赤井さんという人がおるという話は、大学の方で聞いておりました。それぐらい非常に有名な方ですね。 　それでは続きまして加福さんからお願いします。
加福さん	加福と申します。私は2000年まで、サラリーマンで、ご多分に漏れず市民活動・地域活動とは疎遠であり、千里は寝に帰るところでしかありませんでした。０１年、６５歳になって初めて、千里のフルタイムの市民になったということです。０１年、赤井さんからお話のあった、ひがしまち街角広場がオープンし、そこで市民活動・地域活動の諸先輩に紹介して頂き、やがて千里市民フォーラム、豊中のNPO・きずな等の設立と活動に関わる事になりました。コラボについては、その設立を提言した創造会議から参加しました。事業を推進する実行委員は、5年の定年制になっておりまして、私は昨年で引退し、今はサポーターとして活動しています。 諸先輩に聞きましても、千里の市民活動・地域活動が盛んになったのは、０１年頃からだということです。丁度その時期の千里に居合わせたお陰で、従来、これらの活動に縁の薄い「普通の市民」である私もごく自然に多くの活動に参加出来たことは非常にハッピーだったと思います。
松村先生	ありがとうございます。加福さんも非常に長く活動されていて、私も、若いころから、いろいろお世話になっておりました。 　じゃ次に森さんお願いします。

森さん	森です。私は市民活動を実は長くやっていたということではなく、コラボに関わったことが、始まりです。関わったのはですね、運営委員としてではなく、この前身である、創造会議というところから、関わらせてもらっています。そのきっかけになったのは、もともと学生の時に、社会教育とか、生涯学習の基盤整理ということを研究テーマにしておりまして、その中で、豊中図書館の未来を考える会の方にお話を聞く機会がありました。その関係から、平成 17 年にその創造会議の委員を公募しているから、応募してもらえないか、ということでお話をいただいたことがきっかけです。 ちょうどそのころというのは、私が、一人目を出産した直後で、私自身もこれから、例えば仕事をやっていく中で、どうしていこうかというのを迷っている時期だったんですね。その中で、これからも豊中市で子育てをしていくということで、豊中市のことに何か関わりたいなという気持ちがあり、そこからチャレンジャーではあったんですけれども、乳呑児を抱えたままでも会議に参加してもいいのであればということで、応募し採用されたというのが始まりになっています。この運営会議自体は、この今年の 3 月に発展的解消という形で、終了しましたが、私自身は、この運営会議で知り合った人がいろいろおりましてですね、ここらへんからの関係で今後も、豊中でのいろいろな活動に関わっていくという予定にしております。以上です。
松村先生	はい、ありがとうございました。 それでは続いて、片岡さんお願いいたします。
片岡さん	片岡誠です。私は、吹田市民ですので、豊中とは実は縁もゆかりもありませんでした。吹田市のなかでも、千里ニュータウンというのは、大きな面積を占めていますので、そこを、なんとかしないといけないんじゃないかなということで、「千里ニュータウンの再生を考える市民 100 人委員会」というのが、吹田市の方で作られました。その時に委員の公募があったので、私は今でも仕事をしていますけれども、千里ニュータウンには住んでいないながらでも、あんないい街が、もったいないなと思ったので、思わず手を挙げてしまいました。思わず手を挙げてしまうほど千里ニュータウンは魅力があるんだろうなと思います。ここに手を挙げて、100 人委員会というところから、市民がいろいろなことをするというところに入って、足を踏み込んだということです。 それからですね、吹田と豊中では行政が違いますので、少しずつやり方が違って進んでいたのかなと思っています。吹田は吹田で、千里ニュータウンを何とか考えないといけないという、100 人委員会が終わったあとで、市民がまとまって、ニュータウン 100 人委員会で考えたことをちゃんと吹田市が実行してくれるのかどうか、よくウォッチしようと、監視していこうということで、「市民まちづくりネット」という市民の団体を作りました。そこで私もずっと参加しておりましてそのあたりからいろんな千里ニュータウンがらみの、市民の方々の動きを知るようになりました。たぶんそのあたりぐらいから、赤井さんとか加福さんとか、という方々とお知り合いになったのかなと思っております。その時はまだ、私はまだ吹田市民ですと思っていたので、少し距離があったのかなと思います。

	 でもやっぱり千里ニュータウンというのは、みなさんもそう思われているかもしれませんが、あんまり豊中市、吹田市って分けて考えておられないんじゃないかなという感じがします。やっぱり、旧の街とは違って、新しい街なので、私のような千里ニュータウンに実際に住んでいない人間も、すぐ受け入れてくれる土壌があるので、これはおもしろいなと思って、それからはいろいろな活動を積極的にやってきました。今は千里ニュータウンで市民がやられている活動をことごとくではないですけれども、関係を持ってしまっている状態です。吹田市民である以上、吹田市の方にも何か貢献しないといけないなということで、吹田の場合は、南千里にコラボと近い複合の公共施設ができまして、その中に、「市民公益活動センター」という市民の活動をバックアップするような、支援するようなセンターができております。そちらは実は行政、役所が運営しているのではなくて、市民が運営しております。吹田市から市民の団体が委託を受けて、市民の活動をお手伝いするという事業をしております。その団体の今は事務局をやっております。千里ニュータウンで活動されている方々もたくさん存じあげておりますし、何かお手伝いできたらいいなというふうには思っております。あくまでもすべてボランティアですので、そのあたりはご理解いただいて、あいつ何もしていないなとは思われないようにしたいとは思います。以上簡単ですが、私の千里ニュータウンでやっていることです。
松村先生	はい、ありがとうございました。 続いて奥居さんお願いします。
奥居さん	北千里の藤白台というところから参りました、奥居と申します。私も北千里ですので、吹田市民ということになるんですけれども、今 56 歳で、51 年前、5 歳の時に千里ニュータウンに引っ越してきました。ですから、千里は作っている途中から、今まで全部見ているということに、いつのまにかなってしまいました。小学校、中学校、高校までずっと千里で、その時の友達ってみんな遠くに行ってしまって、9 割方いない中で自分は残ってしまって、その中で、千里の変化をずっと見てきました。ニュータウン、かっこいい未来都市だったのが、いつの間にかオールドタウンといわれるようになっていたり、そういうことでテレビなんかに出るようになって、なんか悔しいなという気持ちがあったり、みんないなくなっちゃって、残っている自分が何かしなきゃいけないんじゃないかと勝手に思い込みましてですね。実は大学進学で一回外に出て、東京の方にいったりして、2000 年に帰ってきたんですね、最終的に。それから母親が要介護の状態が何年かありまして、関心がありながらできない時期が何年かありました。 2005 年に母が亡くなりまして、それで時間が空いたわけですね。その時にたまたま、吹田の博物館で、千里ニュータウン展という、特別展企画がありまして、そこに入ったのが人生の間違いというか、そこから芋づる式にいろんなところに引っ張り込まれていまして、千里市民フォーラムには入ることになっているんだといわれてみたり、自治会に引き込まれたり、公民館の委員をやれといわれてみた

	り。まぁ断らない私もお人よしなのですが、そんなようなことですね。あと南千里に千里ニュータウン情報館を作るということで、どうしたらよいかということで聞かれまして、変になったらいやだから、聞かれたら意見言いたいって思ってしまった、そんなことをやってるうちに、訳が分からなくなって今日に至っています。
松村先生	はい、ありがとうございました。 次、水木さんお願いします。
水木さん	水木です。私は 20 年ぐらい前に吹田に来たのですが、出身は九州宮崎で、こちらとは縁もゆかりもないのです。今、みなさんのお手元に、毎月発行している通信をお配りしましたが、「さたけん家(ち)」というコミュニティカフェを、佐竹台に、今年で 5 年目になりますかね、やっています。明日からでもみなさんができるような小さいことを積み重ねている場所です。ひとつひとつはここでみなさんに発表するほどではないので、またホームページなどを見てもらえたらと思います。ホームページはここ(通信)に乗っているので見てください。 何をやっているかというと、多世代交流の場です。私は、もともと市民活動が大好きだったわけでもなく、どっちかと言ったら関わりたくないなと思っていました。すぐ近くの青山台に住んでいた時には仕事もやっていましたし。 第二子を病気で亡くした時に、(松村)先生がさっきおっしゃっていたようなお葬式を自治会の方と育児サークルの方にやっていただきました。この御恩を返せないと言ったときに、あなたが返せるときに返したらいいのよ、と言われて、その通りにしていたら、奥居さん状態になって(笑)、なんとなく今ここにいるという感じです。今日はよろしくお願い致します。
松村先生	はい、ありがとうございました。 非常に多様な方にお集まりいただいて、昔から現在までいろいろな活動をされている方々が集まっておられるということをみなさんにお分かりいただけたかなと思います。 それではこれからが本番で、それぞれの方々が市民活動に関わってしまうような、きっかけですね、はじまりの物語をだいたい 10 分ぐらいの時間の中でお話しいただけるとありがたいなと思いますが。 まずは赤井さんからお願いします。
赤井さん	失礼します。私がどっぷりと、市民活動に入ったのはたぶん、街角広場だと思うんです。その前には、みなさんに家をお借りして、50 年近く前から千里の地区のところにきて、ずっとやってきておりました。歩いて暮らせる町づくりに関わったのが、豊中市に公民分館というのがあるのですが、そこの分館長を引き受けたことからです。ちょうどそれから、ちょっと遅れて、歩いて暮らせるまちづくりの検討委員になり、検討委員でいろいろしている間に、豊中市とのなんとなくの約束ができました。この活動が終わったら、この活動の成果を何か町に返してくれますね、という約束の中で返ってきたのが、部屋 1 つというか 36 平米ぐらいのところをきれいに中だけ、本当に中だけ、きれいにペンキを塗

	って、床を張って、それから流しを一台置いて、ガスを引いてくれて、電気もちゃんとつけてくれて、この場所を作ったから、地域でここをなんとか、歩いて暮らせるまちづくりの提言の中で、地域でコミュニティーができるような場所に使ってください、というのを地域に渡されました。 その時に地域としてなんかしなきゃねってことで、素人ができることは、みんなが集まって、ワイワイしゃべることができる場所があればいいということでした。ニュータウンというのは同年代の人が、同じときに一斉にばっと入居したわけですね。その人たちが、居心地が良かったのか、ニュータウンでずっと年を取り、ふと周りを見れば、少子高齢化の見本ということでその当時有名になっていました。テレビで私も見たことがあるんですけれども、少子高齢化の見本のような街になりました。1500 人近くいた小学生が、163 人になりました。それから年寄ばっかり多くなって、だから子どもがいない町になったんですね。住んでる人が、40 年前からずっと同じ人が住んでいる、だから周りを見渡せば、みんな高齢者になってしまって、その人たちが、今度は職を離れたときに、旧市内のようなゆったりとどこかみんなが集まって、わいわい一日過ごせるような場所があるかって言ったらないんですね。 ニュータウンにはそういう場所が必要だということで、豊中市から、なにか使ったらいいという、なにか社会実験だか、なにか実験をしてください、と言われました。ほいそれちょうどよかったということで、みんなが集まっていろいろ話できる場所にしましょうということで、そこの名前を「ひがしまち街角広場」と付けて、活動を開始しました。それでみんなが来てくれて、いろんな話をされている中で、本当に地域の人同士の交流ができてきました。今までは、仕事やらなんやらで地域との交流は、ほとんどなかったんですね。ところがそれを介して地域との交流ができるようになった。 それからそこがだんだん、小学生も子どもであっても出入り自由にしてあったので、子どもが寄るようになって。そこで何ができてきたかと言ったら、その時の社会情勢もあったのでしょう、先生か親しい人しか話をしない子どもが、地域の一般の人と話ができる場所になりました。 それから、高齢者やいろんな子育て中の人が集まってくれました。毎日来ていた人が今日来なかったら、「あれあの人はどうしているんだろう」とか、地域の周りの人が、「昨夜はあそこのとこは電気が付いていたけど」とか、「まだ元気にしているんちゃう」とか、「でも今日来てないからひっくり返ってるんちゃう」とか、見守りもできるようになりました。それから子どもがいろんなことで、親の言うことを聞かなくなったときも、地域のおばちゃんが、「ちょっとお母さん元気にしてるよ見てごらん」といったら、子どもは人に言われたら泣きやむんですね。そういう子育て的な見守りもできるようになった、そういう場所に街角広場がなりました。 それからだんだんだんだん、多くの人が出入りして、ありがたいことに、スタッフもどういう人かと決まってないんですけど、ここでコーヒーや紅茶を入れてもいいよ、と言ってくれる人がいました。どういう人でもいいですよ、とオープンの形にしたら、やっぱりやってみようかなという人が来てくれて、本当のボランティアになって、手弁当で毎日毎日、必ず 2 人 3 人のスタッフが常駐して、朝の 11 時から、夕方の 16 時まで、ここで過ごしていて、現在もやっております。

	地域の人もコーヒー紅茶その他なんでも100円均一にしております。100円均一でもちろん消費税なんかはかかりません。それがありがたいことに、運営費が、初めの社会実験の時は、豊中市が家賃光熱費は出していただいていました。自主運営になりますと、やっぱり家賃も少しは上がりましたし、光熱費、運営費、コーヒー紅茶の運営費もいります。まぁなんとかかんとかやっていけ、少しずつお金はたまっていくんですね。1年間たったら、開設記念日ということで、たまっていたお金を地域の人に還元するという意味で、ちょっと大盤振る舞いで、飲み放題、食べ放題というような形でパーティーをして、地域の人に日ごろの感謝の意味で毎年そういう行事もやっております。そういう風にして、ずっと街角広場はやってきました。そういう風に、高齢者がよって、なんとなくそこでいろんな話ができて、家で一人でしゃべれない人も、そこに来ればしゃべれるということで、いろんな人と交流ができました。 コラボができたときに、街角みたいにどんな人でも来て、そこでいろんな人としゃべれるような、そういう場所がここにはあった方がいいのかな、というような話も出ました。でもそれは高齢者向け、東町はたまたま、地域の人向けにだったんですけれども、コラボの場合はそうではなくて、コラボを利用する人、または、道行く人に対して、やっぱりいろんな人に制限なくここへ寄って、コラボってどんなところかなと見てもらいたいし、上でやったことの話しの続きもしてもらいたいし、これから行くところにどういうふうな心構えで行こう、どういう準備でいこう、そういう話をしてもらいたいと思いました。こういう多目的スペースとカフェがあった方がいいんじゃないかなと思って、ここへはどうしても作ってほしいというような形で、これはすごく難産でできた場所です。これは本当にいろんな形で、今あるから、気楽なことを言ってますけど、ここの場所を生むのにとっても難産でした。でもいろいろな我々と行政との間での話し合いで、相互理解によって生まれたものだと私は思っています。だからこれからはそこをうまく上手に育てていく、というのがこれからのコラボの活動じゃないかなと思っています。これからのことは、またみなさん若い方に任せて、いろいろどんどんとやってほしいなと思っております。 以上です。
松村先生	はい、ありがとうございます。行政とのやりとりに苦労されたんじゃないのかなと思います。何が一番苦労されましたか。
赤井さん	行政というのは、本当に決まったことのままに言うんですよね。街角広場をオープンするときには、行政というのは、企画書だ、書面だ、書類だ、ときちんとしたものじゃないとダメですよね。私なんか市民は、家計簿も付けたことのない人間ですから、そんな決まり決まった、四角四面の中に入っていけないんです。街角広場を作るときに、そういう四角四面の何もないところに、だからここは今日来た人、皆来ている人に対して、そこに寄り添っていくんだから、決めたこと以外に、右にいかなきゃならない、左にいかなきゃならないとその時によっていろいろあるから、「そんな企画書ですよと作っても意味がないよ」「企画書なしでやりますからね」って言っていました。それを認めてくれた行政マンが私は素晴らしかったと思います。それをしてくれたからこそ、今の街角広場があると思っております。

松村先生	はい、あの非常にいい感じですね。いい話をありがとうございます。相互理解ということですね。歩み寄るということだと思います。 最初の歩いて暮らせるまちづくりでも行政でも、そういうまちづくりが、それが住民のニーズにもちょうど合っていたということから、始まったということだと思います。 では続いて加福さんの方から、お願いします。
加福さん	千里文化センター・コラボのはじまりの物語をお話しします。 その物語を一言で申しますと、市民と市が互いに協働を呼び掛け、コラボという市民活動の空間・場を産み出した物語ということになろうかと思います。因みにコラボはコラボレーション＝協働の短縮語です。 以下、配布資料の４番目「いろいろえんぴつ」に沿ってご説明しますので、ご参照下さい。 04 年、千里中央一帯の再開発に伴い、豊中市は文化センターを建替えることを発表しました。しかし、その後、市民に詳しい情報が入らず、又、市民の考えを伝える場、市と意見を交換する場がないという困った状況が続いていました。しかし、その年 04 年 9 月に、図書館の未来を考える会の女性が施行されたばかりの市民公益活動推進条例（協働事業市民提案制度―市民が提案して、市と協働で事業を行う。）に基づき、千里図書館のあり方について、市と協働で考えようということを公式の場で提案されました。これで事態は一挙に動き始め、市長から、市民と意見交換の場を作りたいという意向が文書で伝えられました。 厚い雲の間から一条の光が差し込んだ思いがしました。又、制度は活用するためにこそ存在するのだということをその時に教わりました。 ０５年９月、今度は市の教育委員会・生涯学習推進室が市民に呼び掛け、新千里図書館公民館創造会議という長い名前の会議を始めます。これは実に足かけ 3 年、25 回の会議を重ねました。その中で、先ほど赤井さんからご紹介があったように、カフェが必要だ、この多目的スペースが必要だ、という意見が出て、すでに決まっていた老人センターは、もう一階上に代わって貰い、この場所が出来上がったということです。その間、生涯学習推進室は関係部署との折衝に大変ご苦労なさったと思います。 ０7 年 11 月、創造会議の最終提言の結びの部分に、コラボの運営の段階にも、市民の参画が必要だと市民が提案し書き入れることになりました。これもその年の初め、07 年 4 月制定された、自治基本条例の２４条に、市の施策の各段階への市民の参画が必要だということが定められており、それに基づいて、上記の市民参画を提案することが出来たということです。 そして次の年、08 年 7 月に市民も参加する運営会議が発足し、コラボという空間・場を市と市民が協働で運営する具体的な方法を審議し、市民から実行委員を募集し、千里の市民公益活動の拠点にふさわしい諸事業 を市と市民が協働で実施することになります。 このように、コラボのはじまりの物語は、市民と市が互いに協働を呼び掛け、先例のないコラボという市民活動の空間・場を産み出そうとダイナミックに挑戦した物語です。難産でしたが、振り返ってみると、やはり「天の時、地の利、人の和」があったのだなあというのが実感です。

市民は条例制度を大いに活用したのですが、活用に値する条例・制度が丁度その頃に誕生したというのは「天の時」です。

運営会議の後に、実行委員会が発足するのですが、委員の募集に対し、意欲旺盛で、自ら活動しようという人材が、約 20 名も集まりました。これは千里の「地の利」です。

このようにモデルのない試みを、市と市民が協働で行い得たのは将に「人の和」があったからこそのことだと思います。

ついでながら、モデルがない試みでしたから、先進事例を視察するということはありませんでした。逆に、現在は他の自治体から、視察が多いと聞いております。

次に、実行委員会の活動の内容ですが、これは配布資料３の黄色い紙の表をご覧ください。多世代・多分野・多文化の共生をモットーに、勘定の仕方にもよりますが 15 ほどのプロジェクトが絶えず動いております。自画自賛ですが、どのプロジェクトもうまく動いているように思います。

それは市民実行委員の企画力・実行力もさることながら、市の事務局の力が活動の非常に大きな支えになっています。有能で親切な職員さんの日常的なサポートが有難いのは勿論ですが、例えば市民にプロジェクトへの参加募集する際、電話も、メールも、市役所に拠点があるということで、信用されるという利点があります。市との協働事業ですから市の広報にも載ります。来られた方にアンケートをしますと、市の広報を見てこられた方が非常に多いことがわかります。

将に市と市民の協働とパートナーシップに基づく活動です。

最後に、コラボの活動の性格・性質についての一寸した考察をご紹介したいと思います。配布資料４「いろいろえんぴつ」の裏の図面をご覧下さい。

これは委員仲間数人で喋っていて思いついたのですが、活動を福祉の分野、文化の分野など分野・ジャンルで考えるのとは別に、情報の型で考えてみたら何か別の事が見えるのではないかと試みたものです。

縦軸は、情報の流れのタイプです。一番上の方は、コラボ大学校のように講師が情報を聴衆に提供するというタイプです。真ん中の水平線上は、情報がその場で交換されるタイプのものです。横軸は、右の方は実用的な情報、いわば、問題解決型です。左側が非実用的な情報、文化的価値があるということです。哲学カフェはその典型ですが、結構人気があります。非実用的な情報を求める市民も多いということです。

これを見ますと、第Ⅰ象限、第Ⅱ象限はいろんな活動がありますが、第Ⅲ象限、第Ⅳ象限は今のところ空いております。最下部にクラウドソーシング型とありますが、下に注釈をつけておりまして、不特定多数の市民に呼び掛けて、必要なサービス、アイデア、情報を得るということです。事例としましては、奥居さんなどが中心になって行われた事業があります。

１４年に吹田市千里再生室が、千里市民フォーラムに呼びかけ、ニュータウンを元気にした 50 のアイデア展というのを実現されました。これはまさにクラウドソーシング型だ

	と思います。見事な展示で、吹田だけではもったいないので、コラボでも展示して頂きました。クラウドソーシング型というのは、いまのところ、コラボの活動の中には含まれていません。これからどうするのかということが、考えられるのかもしれません。 　以上が私のコラボの始まりの物語ですが、これを報告する機会を企画して頂いた関係者の皆様に感謝いたします。
松村先生	はい、ありがとうございます。非常に、今現在多様な活動をされているのも、創造会議でのいろんな方々の御努力によってこの空間ができあがったんだと思います。 　では森さんお願いいします。
森さん	私は先ほど自己紹介でも申しあげましたように、このコラボ以外に市民活動というのはほとんどしてきておりませんので、このコラボの創造会議、運営会議に関わらせていただいてきたことからお話しさせていただきます。 　私自身が創造会議に関わらせていただいた時というのが、学生でいろいろ社会教育に関して勉強してきた流れですけれども、実際に関わってみると、もうすでに設計図も出きていて、かつ、建設業者も決まっている状態から、市民の会議の中から上がった声によって、それらが覆されるというショッキングな経験をしたわけです。まさか自分の目の前で、決まっているものが変わっていくということ、これは何もない状態から新たなものを作っていくというのとは全然違うと思うんですね。今も東京オリンピックがらみでいろいろありますけれども、まさに、規模は違いますが、そういったことが自分の目の前で起きたということで、市民活動ってすごいなというような経験がありました。 　その後無事にコラボという施設ができまして、その後、平成 20 年に新たにコラボの中身をどうやっていくか、というところから市民運営会議というものが設置されるようになったわけです。そこでまた新たな公募があったので、せっかく創造会議に関わらせていただいたので、なにか継続的にこの施設がどうなっていくかっていうのを見ていけたらいいなということから、また応募したということになります。 　やっぱりできてしまったものをどうしていくかということですね。市民との協働というのは、コラボができたときの大前提であったので、カフェができたり、その多目的スペースを活用していこうというのがありました。いろんな自治体の中で、新たな施設ができるときに、複合化ということが進められているんですね。一つの建物の中に違う性格の施設がいくつか入る、この文化センターもそのようなものでありまして、もともとそうだったわけですが、公民館、図書館、市の出張所、老人福祉センターと保健センターといった施設が入っています。複合化された時の課題として、その施設それぞれの性格が違いますし、利用する市民も目的が違うので、どうしても雑居ビル的になってしまうんですね。それぞれがテナントとして入っているだけで、それぞれの施設のつながりはなかなかない。このコラボの施設は市民とのつながり、協働だけではなく、その中の施設間でも協働をしていってこその、コラボなんじゃないかということから市民運営会議、新たに発足した中から、さまざまなワークショップを通して、施設間のコラボというのを図ってきました。コラボの新たな運営会議の中には、各センター長、施設長、とかも委員として入っていただきまして、私たちのような市民委員とフラットな意見交換をするという機会があったわけです。

	こんど逆に市民、利用者の立場からすると、私は第一子を生んだ後、運営委員をしながら、第二子第三子を出産したんですけれども、乳幼児健診というものが定期的にあるんですね。このコラボの多目的ホールが受付場所になっていて、中の保健センターをぐるぐる回っていって、健診を受けるわけですが、みなさんこの健診だけに来るのではなく、健診に来たら、ついでに図書館によっていくとか、そういえば住民票を取ってなかったから取っとこうみたいな感じで、いろんな施設を使ったりするわけですね。ほかにも住民票を取りにきたついでに、イベントやってるから覗こうというように、利用者は施設の中でぐるぐる回る、はしごする、というのがあるので、やっぱり職員の方も、職員の中ではしごしたらいいじゃないかというようなこともたくさんあるわけです。せっかく公民館と図書館が一緒に入っているんだから、一緒に何かをすることがあってもいいし、保健センターが何か情報発信をするというときに、多目的スペースを使って、市民と協働して何かを発信してもいいじゃないか、できるんじゃないかということはいろいろ提案されまして、かなりの無茶を言っていた部分もあるんですけれども、一市民一利用者からいろんな施設がもっとつながってくれたら便利やのに、みたいな話ができたということがあります。 それがみなさんの目にはどう映っているかというと、毎年秋にコラボ祭りというのが行われています。そのコラボ祭りのプログラムを見ていただきますと、ものすごく細かい字でびっしりと、いろんなイベントがあるんですが、それはそれぞれ公民館で活動されている方であったり、図書館のイベントであったり、出張所もそういうところでお祭りに参加しているわけですね。いろいろな相談を受けるスペースを設けたり、保健センターも同じようにされています。そういった形で、ほかの施設であれば、公民館祭りという、公民館単独のお祭りだと思うんですが、このコラボは、全体でそういうイベントができているということが、まさに、運営会議の中で、目指していた、施設間の協働というものの表れじゃないのかというふうに思います。 私自身、自分の目の前で「施設の建設に関わることが変わる」というショッキングな経験をしたわけですけれども、その後も自分たちも含めてみなさんが、会議の中で発言したことがどんどん実現されていくということがすごくおもしろい経験になりました。そういった場所を、コラボというところで、設定してもらったということはすごくよかったと思います。今後も、この運営会議自体は解散というかたちになっていますが、市民の方から言ったら変わっていくんだ、ということを、どんどんいろいろなところで、実感できるようになったらいいなというふうに思っています。以上です。
松村先生	はい、ありがとうございます。非常に市民が関わっていく、深みにはまっていくようなお話ですね。あの、最初の創造会議に参加されるというのは、これはどういうきっかけなんですか。研究とかそういう…

森さん	 はい。あの、創造会議に入った時は、豊中図書館の未来を考える会の方から、こういう会議があるんだけれども、自分でいうのもなんですが、そのころは割と若かったので、若い人にも入ってほしいということから、豊中にも住んでいるし、よかったら応募してみませんかというかたちで、声がかかったんです。私自身も、他の神戸市とか、川西市とかにはいろいろ研究でフィールドワーク的に入ったことがあったのですが、実は豊中市にはあまり関わってなかったので、何かの形で関わりたいという気持ちがありまして、その中で入ったという感じです。入った時は、全然前段階を知らなかったので、なんだこれはみたいな、みんな怒っているけどなんでだろう、そんな印象でした。
松村先生	はい、ありがとうございます。 まあ、大学の学生もたくさんいるんですけど、なかなか自分の住んでいるところに関わるきっかけってないんですよね。そういう意味では、森さんは非常にいい出会いがあって、そこでいい体験ができたというのが、その経験につながるようなきっかけになったんだと思います。 じゃあ、続いて片岡さんの方からお願いします。
片岡さん	先ほど自己紹介でも少しお話しましたけれども、私は吹田市民で、吹田のなかでもはずれの方に住んでいるんですよね。千里ニュータウンに住んでいるわけでもないですし、吹田のはずれの方に住んでいますので、そもそも、ごくごく最近まで、吹田市民であることすらあまり感じない、どこに住んでいても関係ないという生活を送ってきました。多分、そういう方がほとんどじゃないかなと思うんですけれども。その中で 2001 年の、もう 14 年ぐらい前になりますけれども、たまたま「吹田市千里ニュータウンの再生を考える市民 100 人委員会」を作るので、参加しませんかという募集を市報で見たんですね。それまで別に役所に入ることなんてないと思っていたんで、たぶんこの 6 人の中で一番不純な動機で、ひょっとしたら何か仕事に役立つかもしれないなという程度で応募しました。 千里ニュータウン自体は、名前は知っていましたし、住宅、団地の中を通ることもあったので、「なかなか住みやすそうな町なのに、誰も住んでいる様子はないな」という感じで、もったいないなと思い、100 人委員会に参加したんですよね。これは市がやろうといったことに、市民が手をあげて、いろいろ考えるということだったんですよね。なかなか吹田市、粋なことをするなと感じていたんですけど、なんか市民に考えさせるなという、市民が使われている感が出てきました。それはまあ、行政サイドのいろんな思い・考えがあるんだと思うんですけれども、たぶん私がそうであったように、自分の街なのに、自分の生活を自分で考えてなかったんですよね。それが、たまたまこういうきっかけで、考えないといけないんだなというふうなことを感じたのが、この 100 人委員会だったんです。 100 人委員会というのは、千里ニュータウンの環境だとか、建て替えの問題だとか、商業、賑わいだとか、そういうすべての面で千里ニュータウンをこれから作りなおしていく

	ために、市民がどんなふうに考えたらいいのかということで、かなりの内容を2年間ぐらいにわたって、こちらの創造会議のように、30回ぐらい近い会議をやって、まとめました。それがたまたま吹田市の方では、吹田市の再生の方針にしようということになりました。ほんとに、吹田市は、市民が考えたことを、ほぼ100パーセントに近い状態でかなえてくれていたんですね。でもやっぱり市民ですね。役所がやっていることが信じられない、本当にその通りにやってもらえるのか、ちゃんと見てやろうということで、「千里まちづくりネット」というまちづくり100人委員会に参加した人を中心にして、監視の部分を作りました。別に監視じゃないんですけれども、本当に自分たちが考えたことを、市が実行してくれたらいい街になるだろうなと思って。それで、それを見届けたかったんですよね。それだけの純粋な思いだったんですけれども、たぶん見届けるためだけで、「千里まちづくりネット」という団体は、誕生していました。 　私はそちらの方に参加したんですけれども、だんだんと遠くから、「千里ニュータウン全体を考えるような会ができているよ」ということをちらちら聞きました。それが「千里市民フォーラム」という団体でした。これも大本は、千里100人委員会からできた、まちづくりネットと同じように、「千里ニュータウンの40周年の記念行事」からできた団体だと聞いております。中身は同じかもしれないんですけれども、そういう団体があるということを聞きました。私は吹田市民だから、吹田でやっていればいいぐらいの調子でいたんですけれども、だんだんと千里ニュータウンというのを考えると、豊中の方も、無視することができないしなという思いになってきまして、いつの間にか「千里市民フォーラム」という団体にも、介入するようになりました。そこで、赤井さんや、加福さんという経験を積んだ老年な方々を知ったわけなんです。 　それで、より千里ニュータウンのいろんなことを知るようになりましたし、考えるようになりました。知るとなにかやりたくなるんですよね。最近病気じゃないかと思うぐらいですけれども、ちょっと気になることがあるとそこに首を突っ込んでしまい、にっちもさっちもいかなくなるような傾向がありますけれども。千里ニュータウンというのはいろんな問題があります。問題を解決しようということで行政も市民も、みんな動いていると思いますけれども、もっと千里ニュータウンを知ってもらったら、より力を貸してくれる人が、増えるかもしれないし、興味を持ってくれる人が増えるんじゃないかなと思いました。また　奥居さんが話してくれるよな、「千里ニュータウン展」というのを吹田市の博物館でやりました。博物館ですから、普通は、昔の土器とか、石器だとか、江戸時代のとか、そういうのをイメージしますが、それだったら「博物館に市民誰も来ないな」っていうことで、千里ニュータウンというまちをそこに展示しております。市民が考えた、そして行政はたぶん考えられないだろうということで、市民にお話が回ってきたんだろうと思います。いずれにせよ、役所が「手におえない部分があるから、もっと知識や知恵のある市民にやってもらった方が自分たち楽できるよね」というのが行政の考えがあったんじゃないかなと思います。あまり行政にいい思いを、いい思いをというか、普段関心がなかったから、こう思ったんでしょうね。でも100人委員会、千里市民フォーラム、千里ニュータウン展というのをお話ししましたが、どれをやっていても、市の職員の方々、本当に一生懸命やってくださいます。あれ言ったらすぐ動く、こういったら、ちょっと行って調整してくれる、そういうことはよくやってくださって、いい人に恵まれたのかも知れませんが、それ以来私は行政の方々は信頼できるというふうに思っております。「信頼できる

	からお任せする」ということはしませんが、「お互いに同じ立場で、市の職員も吹田市民みたいなものなので、一緒にやっていったらいい」という話なんじゃないかなというところで、今までずっとやってきました。 　そうすると、もっともっと千里ニュータウンだけじゃなくて、吹田市全部のこともやってみたいなという欲張りなところが出てくるんですね。豊中市も、吹田市もそうですけれども、なかなか行政だけではできないこと、市民の意見をもっともっと聞かなきゃいけないだろうと思うようなところを、少しずつ市民に振ってきている。それが自治基本条例というものだと思うんですね。豊中市も吹田市も自治条例ができています。それにのっとって、市民と行政が対等に、協働という言葉が、赤井さん加福さんから出ていましたが、協働のスタンスが、対等がいいのかどうかは別ですけれども、市民にもっともっと活躍してほしいということを期待されています。市民はもっと活躍すべきだろうなと、自由に活動していいんだろうなということで、「市民公益活動センター」ができました。豊中は確か公益活動センターはなかったと思います。吹田はいち早く、構想自体は、15 年前からあったのですが、やっとできることになりました。それは市民が使うものですから、市民が「自分たちで考えさせてよ」といったんですね。言うと市の方も、「じゃ考えてください」ということになって、「市民公益活動センターの運営準備会」というのを作りました。私も、その時は千里ニュータウンのことも首を突っ込んだり、それ以外のこともやらせていただいていたので、ぜひやりたいなと思いまして、ここにも参加しました。今の南千里にできました、コラボのまねをしたわけではないですが、「市民公益活動センターラコルタ」というところを開設しました。 　最初は、市民は役所の人とは違うと思っていましたが、こういう活動をするなかで、役所の人も市民と同じだなと思うようになってきました。最近は、また少し感じが違うようになってきて、「役所の人のことを考えて市民は動かないといけない」、というのは、今は「市民は行政を動かす方に回っている」からです。コラボの運営自体も、市民の方が意見を出し、本当に今使い勝手がいいようになってきているんですね。市民が自分たちのことを考えて、行政を動かすというのが本来の姿で、そこにやっと今市民が近づいてきたんじゃないかなというふうに感じている昨今です。こんなことを常々思って公益活動をやってきました。以上です。
松村先生	はい、ありがとうございます。吹田の街づくりのことをいろんな面からお話しいただけたと思います。 　次奥居さんお願いします。
奥居さん	私はまだ会社員でして、特に市民活動の専門家というわけではないんですけど、なんでこんなに次々とニュータウンと関わっちゃうんだろう、お人よしなのだろうか、なんなんだろうか、僕はそんなに頼られているのだろうかといつも考えるんですけど、結局おもしろいんだと思うんですよね。 　先ほど話があった、吹田市博物館ですね、ニュータウン展っていうのが、2006 年春、もう少しで 10 年になるんですけれども、その市民委員会が、2005 年の 12 月にありました。ちょうど母親が他界した直後で、阪大の大学院生の人に、ちょっと覗いてみませんかといわれて、心にぽっかり穴が開いている時期で、ふらふらと行っちゃったんですよね。

そしたらものすごい勢いで、60 歳や 70 歳の人たちが、ニュータウンのことを細かく議論、というか好きなことをしゃべっているだけなんですけど、びっくりしてですね。ものすごい活気といいますか、市の職員である博物員の人が困った顔をして、議事録をとっていて、その勢いに巻き込まれたというか。一番多い年代、60 代とか 70 代の方が多かったんですけど、僕その時まだ 40 代だったのでかなり若くて、若いまだ働いているやつが来たって、すごく歓迎されました。しかもニュータウンのことを最初から知っているということですごく歓迎されて、ボランティア名刺みたいなのを持ってらして、ものすごい数のボランティア名刺をもらったんですよね。カレンダーの裏に刷ったような自分の名刺なんかをもらって、「次も来るよね」って言われて、もう、「はい来ます」って言っちゃうんですよね。なんて言うんですかね、だまされたというか、巻き込まれたというか、そんな感じでした。僕に声を掛けてくれた大学院生はいつの間にか来なくなっちゃってですね、僕が一番若くなっちゃって、使い手があるものだから、頼られるというか、「こんな物作って」とか「あんな物作って」とか、そうするとまたこっちも面白くなるので、深入りをしてしまいました。結局千里ニュータウン展は、2006 年春に 44 日間会期があったんですけど、44 日間で 2 万 2 千人、観客の方が入って、吹田市博物館のそれ以外のレベルからいくと 2 年分の来場者数が 44 日間で入っちゃったんですよね。もうすごい話題になっちゃって、自分の街のことを展示するってこんなに面白いんだってみんなは気がついた。それを最初から知っている自分は、ものすごく貴重な情報を持っているんだと気が付いて、なおかつ、まだ 40 代ですから、もちろん私は会社の仕事をしないといけないんですけど、作ってといわれたら作るし、書いてといわれたら図面も書くし、広告代理店に勤めていたので、半分仕事みたいなかんじでしが。自分の仕事で持っているスキルがこんなに地域の役に立つならいくらでもやるという形でここまで来てしまいました。

それからですね、ニュータウンに詳しいという話になってしまいました。そのころ藤白台で団地の建て替えの話が持ち上がって、自治会がすごいことになっていたんですね。反対や賛成などいろいろなことがあって、「自治会も出てください」ということになって、反対運動とか嫌だなと思いながら、まちが無茶苦茶になるのは嫌だからつい入ってしまったら、また巻き込まれちゃって。基本的に僕は、反対でも賛成でもどちらでもなかったんですけど、めちゃくちゃになるなら自分が役に立とうと思っていたんで、委員に入ってしまい、そこからまた抜けられなくなってしまって。これはみんな楽しそうにやっていたというか、みんな怒って帰るんですよね。市民は怒って帰って、みんなはおもしろそうにやっていたり、みんなが怒りながら会議をやっていたり、どっちにしても自分が深くかかわっていって。そんな中で、よそのニュータウンはどうなっているんかなと思って、気になって、どこのニュータウンも同じようなことが起こっているんじゃないかと思って、名古屋の高蔵寺ニュータウンを見にいったんですよね。そしたら千里そっくりなまちが名古屋の郊外にあって、なんか SF のように、同じまちが、遠いまちにあるんですよね。

そこから違うニュータウンを歩くというのにはまっちゃって、多摩ニュータウンなどいろいろあちこち行って、日本全国で今 160 か所行ったんですね。自分がニュータウンのことについて小さいころから知っているというのを、仕事にも導入しながら、まちの人ともつながりながら、これはもうやるしかないでしょという気分になっていました。そこに老練な加福さんや、赤井さんや、片岡さんとかいろんな人と知り合うわけですよね。知り合うとまた面白くて、「君はもう千里市民フォーラムに入ることになっているんだよ」といわれて、決まっていることみたいに言われて、なんとなく入っちゃうという。そして、知らないニュータウンで、こういった活動をやっている人がいるんですよね。そういう人たちの話を聞くのがまた面白くて、いろんなニュータウンに行ってまちを歩くんですけど、まちを歩いていくと、曲がり角行って、次の曲がり角が見える。また歩いていくと新しい景色が開けて、次の景色が見えてくる。そうやってあの角まで行ってみよう、あの角まで行ってみようとどんどん歩いていくうちに、大きなところに開けたりしてですね、面白いなと思います。その中で人に出会っていくのが面白いなと思います。

そのうちに、「千里ニュータウンがまちびらき 50 年だよ」って話があって、「やっぱり何かやるよね」、「やるでしょう」という話になって、いろいろやりました。その中でたとえば千里キャンドルロードという、ニュータウンの人口とほぼ同じ 9 万個のキャンドルをともそうとなって、イベントをやって、50 年が終わった後も、「毎年やりたいよね」っていう話になって、「毎年やるのはいいけど俺がやるのかな」みたいな。それもなんとなく委員に加わって、50 年をきっかけに、南千里に、「千里ニュータウン情報館」というのを作りました。最初は千里ニュータウン建設記念館っていう仮称だったんですよね。そういうのを作ろうと思うんだけど、市民のみなさんに意見を聞きたいという会があって、「建設記念館って昔のことだけを展示するのはよくないと思います」と言ったら、いつのまにか情報館という名前に変わっていったりですね。古い写真を大量に集めたからこれを鑑定しようという、年表の 2009 年のところに、資料整理プロジェクトというのがありますけれども、千里ニュータウンのいろんな古い写真を市民から集めて、それを次々とスライドで見せられて、みんなでそれがどこなのか、何年から何年の間なのかということを次から次と言うんですよね、事情を知っている人が、「千里中央航空写真だったら、読売文化センターができているから 1977 年以降で、モノレールができてないから 90 年より前である」とかって言うわけですよ。次々とやっていると、また詳しくなっちゃったりしてですね。今度は情報館がオープンすると、博物館と同じことにしたらいかん、人がいないような施設は全然意味がないので、展示はちゃんと新しいものをやっていかないといけないでしょうということで、ニュータウンを展示した 50 のアイデア展というのを去年の秋にやりました。

それから今年の秋にはですね、戸建て住宅地、「アイデアいっぱい千里ニュータウンの戸建て」という展示を 10 月、11 月にやることになっていて、展示内容を、今日も帰ったら作らなくてはいけないというような状態でございます。そのようなことで、どこまでいっても、終わりはないんですけれども、まち歩きと一緒で、どこまで行っても、次の角が出てくる、次の景色に会いたくて、また次の角を曲がってしまうということかなと思ったりしています。そんな中で、楽しくだまされて生きていけたらそれでいいかなというような感じですね。

松村先生	はい、ありがとうございます。　最初の勢いであるとか、討論の場とか、思わず入ってしまうというのは非常によく分かる話です。 「君は入っていることになっているから」といわれて、そのままずるずると市民活動に入ったりとか、千里市民フォーラムにも加福さんから「松村先生も入ることになっているから」と言われて入ったり、たぶんそういうことでつながって行って、次の景色が変わっていくんだろうなと思います。 それでは水木さんお願いします。
水木さん	ニュータウンに精通した方の次は、すごくしゃべりにくいんですが… 私、ニュータウンには住んでいなくて、佐竹台の隣の佐井寺というところに住んでいます。12、3 年前に、校区変更で佐井寺 4 丁目だけが佐竹台(小学校校区)になって、そこからが佐竹台との関わりです。吹田市は自治会(活動)が熱心なので、(自治会に)入っていないと、子どもの行事案内が来ないなどの問題が起きて、その時に協力してくれたのが(連合)自治会長でした。お世話になった地域の方からの頼まれごとを受けているうちに市民活動が始まっていきました。関わってみると、高齢者の方が何から何まで地域のことをやってらっしゃることに気づいたんです。若い人にも仕事が分担できたらと思い、人が出会う場があったらいいなと思いました。 ニュータウンは整備されているまちなので、空き店舗などが少ない、地価も高いので借りられる家賃でもない、いい土地は市民活動にはマイナスだとも思いました。たまたま近隣センターの大家さんに(店を)使っていいよと言っていただけたので、トヨタ財団に応募、採択され、「さたけん家(ち)」ができました。高齢化が進んだまちに、みんなが集まれる場所の仕組みが作れたら、きっとほかの地域でも誰かが作れる、という思いを企画書に書きました。 現在「さたけん家（ち）」は、子ども、高齢者、障がい者、いろんな方が集まる場所になっています。今、私が力を入れているのは学習支援です。どんな家庭の子どもでも勉強ができる場所を作りたいと思い、始めて 3 年目になります。私も赤井さんと同じで、最初から計画していたわけではなく、“これできるよね”とか、“もったいないよね”とか、“こうなったらいいのにな”とか、活動を通して気付いていきました。自分の子どもが生きていく未来が、いい世の中であってほしいなと思った時に、自分以外の子も幸せでないと、という思いを持ち今の場所(学習支援)があります。 社会に必要とされることに気付くのは、かえって、私たち市民なのかなと思っています。生活しているから気づくのであって、行政の方もお手伝いはしてくれるけど、数年で移動しちゃうので(気付きにくい)。 この前計算してみたんですけど、私、5 年間で活動費として 1800 万円集めていたんですよ。私のところには入ってきてないんですけど(笑)。今運営費はもらってないので本当にぎりぎり。去年の黒字が 2800 円で冷蔵庫が壊れたらアウトという状況です。 ただ頑張っていると、最近は吹田市の方から、視察に来てくれたりだとか、(トヨタ)財団の方から論文の助成をいただいたりとか、そういう形で手を差し伸べていただいているので、仮に冷蔵庫が壊れてうちを閉めることになっても、仕組みは残るのかな、と思っています。

	 これまでの活動から、いろんな社会の問題が見えてきて…貧困であったり、児童虐待であったり、高齢者の福祉であったり。そういう問題を解決する町医者的なものが居場所なのかなと思っているんですね。小学校区に一か所ぐらいがコミュニティーの限界かと。こういった場所がたくさんほしいと思うと、やっぱり行政と一緒にやっていかないと難しいのかなと思っています。関心のある方に(さたけん家を)見に来てもらえたら説明もしますし、一緒に考えてもらえたらと思っております。
松村先生	ありがとうございます。 本当に社会の問題が見えてきてしまったらやらざるを得ないと思うんですよね。昔小さいころのアニメでキャシャーンというのがあったんですけど、「キャシャーンがやらなきゃ誰がやる」という決めゼリフがありました。やっぱり地域の問題のプロというのがありましたが、地域のプロとして見えてしまったがゆえに、これを背負わないといけないという、それはよく分かるんですね。私も今松山に住んでいるんですけど、いっぱいあるんですよね。そういう問題が見えてきたらやらなしゃないなという状況に巻き込まれつつあるので、水木さんの気持ちも少し分かるような気がします。 すみません、予定の時間が迫りつつあります。本当はもっともっとお話を聞きたいのですが、これだけのメンバーの方々にお話を聞ける機会はあまりないんですけれども、時間が迫ってきます。 ここで質問とか、どういうことですかということがあればお伺いしたいと思うのですが、どうでしょうか。
参加者の方	豊中市ニュータウンから来ました。自治会と市民活動の違いを聞きたいと思います。
松村先生	そのあたりは、赤井さんですかね。
赤井さん	私は、自治会活動というのは経験があるといえば、あるんですけど、千里ニュータウンの中は、穏便にやっていましたので、自治会と言えたのは、マンションの建て替えですよね。自治会活動、自治会の方の意見集約というのが大変なんですよ。それで私は一番言っておきたいことは、「自治会活動というのは、自治会の人たちの代弁者である」ということです。自治会員の意見をよく集約すべきだと思うんですよね。一部の意見を突出したりとかそういうのではなくて。それとともに、相手に向かう時は、後ろに自治会の何百人の自治会員の代わりに私はここに来ているんだという意識でやっていかないといけないと思うんです。 市民活動というのはそこまで大げさではなくてわりに、「自分のやりたいこと」と言ったらおかしいですけど、「これをやってみようかな」と思うことをぱっと前に出てやってみたらみんなが付いてきてくれるというのが、市民活動であると思うんですね。でも組織の中の自治会員活動は、あくまでも、どちらを向いてものをいうかというと、住民の人た

	ちの代弁者だということを忘れたらいけないですが、市民活動は割に束縛なく自由にやれるところがあって、私はそちらの方にだんだんだんだん傾いていったかなと思います。 　これで答えになりますでしょうか。
松村先生	では会長経験者、加福さんお願いします。
加福さん	一般的には自治会活動は地縁的活動であり、市民活動はテーマ型の活動であると言えます。自治会は入会率が落ち、役員のなり手を見つけるのが難しい、或いは、逆に古株が役員を占拠して人事が硬直化するという問題に悩んでいます。０５年、私は「抽選」で北町の会長に選出されました。自治会が地域の唯一の組織であった時代もありましたが、やがて文化・福祉・防犯などの機能別に組織が整備され、自治会は行政書類の配給組織、寄付の集金組織ではないかと揶揄されることもあります。 　そこで豊中市では配布資料の年表にありますように１２年、１４年を皮切りに地域自治協議会を発足させています。これは地域の住民全員、赤ちゃんから老人までの全てと、自治会・福祉委員会・公民分館などの組織で構成され、自治会と機能別専門組織を包摂した、新しい形の地縁的組織でコミュニティの活性化を目指そうとしています。今後はこの新しい地縁的組織の活動と、テーマ型組織の活動が、どう補完・融合しあえるのかが問われることになります。 　０５年は未だこの協議会的なものの必要性が識者の間でやっと論議され始めたばかりの頃であり、又、北町は硬直化した人事問題を抱えていましたので、自治会長は中々大変でした。しかし、市民フォーラムのお陰で、北町以外の東町や吹田の先輩会長さんの助言も得る事が出来、心強かったことを思い出します。
松村先生	はい。ありがとうございます。奥居さんどうですか。
奥居さん	吹田と豊中は、自治会の仕組みがずいぶん違うというか、吹田の方が自治会に重きがあるというか、基本一緒だと思うんですよね。 　自治会の役員をやっていて、例えば、盆踊り、体育祭、自治会ではこの二大行事をものすごい勢いでやって、「何のためにこんなことやるんだろう」と思うんですよ。めんどくさいし、体力使うし、本当に地域に必要なことじゃないんじゃないかと思うんですよね。でもやるとみんなすごい喜んでくれるというのを見ると、これはもう自治活動であると。そういうことをやるとお互いなんとなく、あの辺に住んでいるのはこういう人だなと分かる。そういうことの中で、なんとなく近隣関係ができていくという、まあ自治会で壊れる近隣関係もあるんですけれども、結局一緒かなという気がします。入口がちがうだけかなという気がします。
松村先生	はい、ありがとうございます。確かに大目標は同じなんだろうなと思うのですが、組織の存続に走っちゃうと、ちょっと変な方向にいくなという気がします。 　他どうでしょう。
参加者の方	千里ニュータウンという地域は豊中、吹田の共通地域での名称ですけれども、その割には、活動や意識そのものも、連帯感といいますか、そういうものがないんじゃないかなと

	思います。豊中市吹田市市民全体も、千里ニュータウンとしての密接な地域感がうすいんじゃないかなと。エリア的に区別してしまって、吹田市と豊中市の千里ニュータウンの意識というか連帯感が薄いんじゃないかなという気がするんですね。 　もともと千里ニュータウンの、千里という名称は、吹田市の千里山あたりからの影響がスタートですかね。僕は吹田も豊中も両方縁があるんで、学校も関西大学で、そのころは千里のニュータウンのまちもなかったのであれなんですけれども。まあ豊中市と吹田市が両地域としては、千里ニュータウンは後からできたものですが、全体の市民から見たら密接な仲間意識が十分ではないんじゃないのかなと。ただ、僕は両方ともつながりがあるんで、千里ニュータウンに住んで、全体としてのもうちょっと豊中市吹田市のレベルアップがあると、市民活動も効果がより出てくるんじゃないかなと、お話をお聞きしていて、ふと思ったんですけれども。これは、私の一方的なあれなんですけれども。
松村先生	はい、ありがとうございます。確かにそういう面もあるかと思うんですけれども、千里市民フォーラムをやったり、一体感ができるようにと願いながら作られたんだと思うんですけれども、どうですかそのあたりは、片岡さん。
片岡さん	私も千里ニュータウンに住んでいません。比較的ニュータウンにかかわりがあるので、結構千里ニュータウンで活動されている方々は、それぞれ自分のところのことを考えられるんですね。吹田で活動されている方々は、吹田のことを考える。豊中でやっている方々は、豊中のことをというふうになってしまって、どうしても、自治会と同じですかね。つながりが、お上とつながるので、行政の沸点が、ものすごく、見えないところであります。でもそうはいっても、千里市民フォーラムという団体ですとか、先ほど話が出ていましたが、千里キャンドルロードというものは行政の枠をこえてしか動けないので、やっぱり行政の枠はどちらかというとあると困る。困るけれども、現実に行政という枠はあるのでね、それをどうやって超えるかというのを一生懸命考えています。だから、隙あらばというところがあって、それぞれ、「一緒にやってくれてありがとう」、「豊中市さん、吹田市さんがこれだけやってくれたからやってね」とか、「豊中市さんがあれだけ一生懸命人を出してくれたから、吹田市さんも出してね」とか。うまく、最近では市民の方が使っているんじゃないのかなというふうに思います。 　一体感という意味では、吹田豊中、住んでいる人が、行政の枠内でしかつながることがないので、あえて飛び出して市民の活動を広いエリアでやらない限りは豊中の人は吹田市の人と一緒にやることはないですし、逆の場合もないわけなんですね。この千里ニュータウンにとっては、この行政の枠というのは、非常に将来的にも、問題が残るんじゃないかなと思います。何年も前から、「千里紙」を作ったらというような話があるんですけれども、まさにその辺の話なんだろうなと。市民が、もっともっと自分たちのことを考えてやりだすとですね、行政の方も、「じゃ千里はもう手放すから千里のことは千里でやってよ」というふうに、ひょっとしたらいつかおっしゃるかもしれない。これは 50 年後、100 年後かもれないですけれども、それはやっぱり千里が変わっていけば、周りの状況も変わり、時代も変わりますので、それを市民が頑張ってやるしかないんだろうなと思います。それがくるまで、市民のために、市民のことをやるということをやり続ければ、自然とそうなっていくような気がします。

松村先生	はい、確かにそういう領域、境界を越えていくのも市民の力なのかなと思います。 すみません。少し時間がオーバーしてしまって、いろいろまだまだお話ししあたいことはたくさんあるかと思いますが、一応ここでパネルディスカッションを終わりたいと思います。 今日は千里市民活動の始まりということについてお話をいただきました。 ここの空間ができるまでのお話であったりですとか、それぞれのみなさんの活動の中でのアドバイスがありました。そこで一つポイントなのは地域の問題が顕在化しているといいましょうか、これが問題だという時に、先ほども少しお話がありましたが、地域の問題がきっちり見えてくると、なんか関わってみようかなと思う気持ちが出てきます。 それともう一つは、本気でやっている場面を作らないといけない。そういう場を作るのは行政かもしれませんし、市民かもしれませんが、とにかく、本気で関われるような人たちがここにはいてると。水木さんもやっていこうかなと思ったときに、困ったときに相談したら、使っていいよと言ってくれて、本気でやってくれるような人に出会うと、うまくいき、次の活動が生まれてきて、人がつながって活動がつながって、ずっとつながっていくんじゃないかなと思います。その最初のきっかけというのをいかに我々が作っていって、関わっていくことが、これからの市民のあり方を変えていくんじゃないかなと思いました。 本当はもっとお時間があればもっと深い話が聞けるかと思うんですが、今日はこのぐらいで終了させていただきまして、また、この先というのは、次回、将来の方にお任せしたいと思います。では、これでパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。 どうもありがとうございました。
司会	それでは、お時間になりましたので、これで終了とさせていただきます。 講演いただいた松村先生とパネラーの皆様に今一度大きな拍手をお願いいたします。本日は、ご参加ありがとうございました。

第11回千里文化センターフォーラム

2015年

8月29日（土）

14:00-16:00

千里文化センター「コラボ」

2階 多目的ホール

豊中市新千里東町1丁目2番2号

北大阪急行 千里中央駅 北改札出てすぐ

参加費無料 申込不要 保育あり

（保育は事前申込必要）

フォーラムテーマ

千里の市民活動のはじまりの物語

～コラボの歴史を振り返ってこれからの活動を考えよう～

千里ニュータウン地域では市民活動がさかんですが、豊中市千里文化センター「コラボ」や吹田市「千里ニュータウン情報館」のたちあげが市民活動の大きなきっかけとなりました。

今回は、そのたちあげに関わった方々の、当時の熱い思いや現在の活動の様子をお話いただきながら市民活動の過去と未来を考えます。

第1部 基調講演 30分

「市民活動のはじまりの物語の共有はなぜ必要なのか」

まつむらのぶひこ

松村暢彦先生（右上写真）

愛媛大学教授

元 豊中市千里文化センター 市民運営会議会長

第2部 パネルディスカッション 60分

コーディネーター：松村 暢彦 先生

パネラー：

- 赤井（あかい） 直（すなお） さん　元 豊中市千里文化センター 市民実行委員
- 奥居（おくい） 武（たけし） さん　ニュータウン育ち・ニュータウン研究家
- 片岡（かたおか） 誠（まこと） さん　千里市民フォーラム 事務局長
- 加福（かふく） 共之（ともゆき） さん　元 豊中市千里文化センター 市民実行委員
- 水木（みずき） 千代美（ちよみ）さん　佐竹台スマイルプロジェクト 代表
- 森（もり） 由香（ゆか） さん　元 豊中市千里文化センター 市民運営会議委員

※50音順

ディスカッション後 質疑応答あります

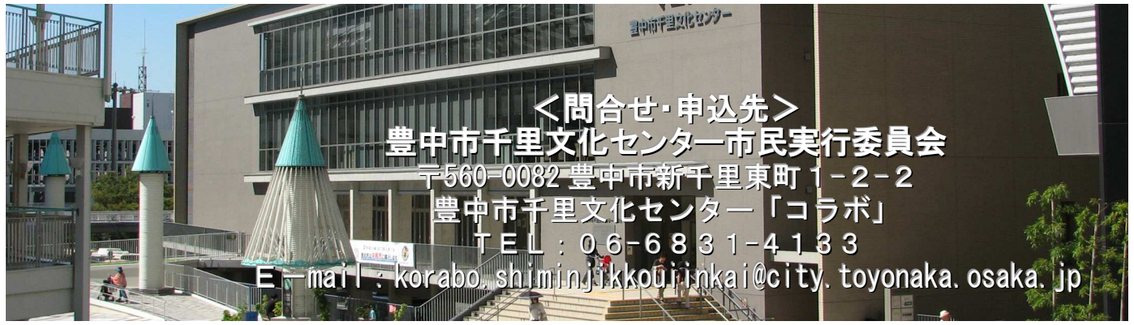
主催 吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議
共催 豊中市千里地域連携センター

お問い合わせ先
吹田市千里ニュータウン情報館（千里再生室） 06-6155-3933
豊中市千里ニュータウン再生推進課 06-6858-2674

千里をめぐる市民活動略年表（2001-）

作成：奥居

	豊中市側	共通	吹田市側
それ以前	ニュータウン開発当初、施設の不足改善や住民の親善を求める運動から自治会活動が発足。 1970年代から吹田市側では単位自治会をまとめて連合自治会結成へ。 1980年代から公民館など整備。豊中市側では公民館制度を中心に市民活動の制度がととのう。		
2001（平成13）	**●「ひがしまち街角広場」開設**（国交省の社会実験として半年間運営され、その後市民の運営に）		●「吹田市市民公益活動の促進に関する条例」制定 ●「千里ニュータウンの再生を考える市民100人委員会」発足
2002（平成14）		●千里ニュータウンまちびらき40年 ●「千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム」開催	
2003（平成15）		●豊中・吹田両市の肝いりで**「千里市民フォーラム」設立**	●「市民100人委員会」から**「千里まちづくりネット」**設立 ●「千里ニュータウン再生ビジョン」策定
2004（平成16）	●「豊中市市民公益活動推進条例」制定 ●豊中市が千里文化センターの建替え方針を決定 ●「豊中図書館の未来を考える会」が新図書館のあり方について提案		●「千里ニュータウンのまちづくり指針」策定 ●吹田市が南千里駅前公共施設建替え方針を決定
2005（平成17）	●豊中市教育委員会が市民参画による「新千里図書館・公民館創造会議」を設置		
2006（平成18）			●「吹田市自治基本条例」制定 **●吹田市立博物館「千里ニュータウン展」**、市民企画により話題を集める
2007（平成19）	●「豊中市自治基本条例」制定 ●「創造会議」最終提言.	●「千里ニュータウン再生指針」策定（大阪府、豊中市、吹田市、UR、大阪府住宅供給公社、タウン管理財団の6者が構成する「千里ニュータウン再生連絡協議会」による	●佐竹台（ニュータウン最初の住区）「再生まちびらき」 ●吹田市立博物館「万博展」. ●吹田市が市民公益活動センターを南千里に設置決定
2008（平成20）	**●新千里文化センター（コラボ）開館。**公募市民・学識経験者・コラボの各施設長（市職員）で構成する「千里文化センター市民運営会議」を設置		
2009（平成21）	●公募市民で構成される「豊中市千里文化センター市民実行委員会」が発足		●「千里ニュータウン資料整理プロジェクト」、12回にわたり市民有志がニュータウンの古い写真を鑑定 ●吹田市が市民公益活動センター運営準備会を市民参加で設置
2010（平成22）			●「（仮称）千里ニュータウン建設記念館」検討会
2011（平成23）		●千里ニュータウンまちびらき50年企画委員会発足	**●「さたけん家」オープン、活動開始**
2012（平成24）	●「新千里東町地域自治協議会」発足	●実行委員会に移行 **●千里ニュータウンまちびらき50年**	**●吹田市立市民公益活動センター（ラコルタ）開設** **●「千里ニュータウン情報館」開館**
2013（平成25）		**●「千里キャンドルロード」継続開催へ**	●古江台「街ぐるみで関わるハロウィン」開催
2014（平成26）	●「新千里北町地域自治協議会」発足		●「千里まちづくりネット」解散
2015（平成27）			



＜問合せ・申込先＞
豊中市千里文化センター市民実行委員会
〒560-0082 豊中市新千里東町１-２-２
豊中市千里文化センター「コラボ」
ＴＥＬ：０６-６８３１-４１３３
Ｅ-mail：korabo.shiminjikkoujinkai@city.toyonaka.osaka.jp

コラボ運営は市民が主役

■屋上庭園

屋上分科会委員と屋上サポーターが週２回、庭園の手入れや花づくりを行っています。また、メンバーの技術向上のために､「スキルアップ講座」を開いています。屋上分科会のイベントとして ハンギングバスケット講習会や寄せ植え体験を開催しています。

●作業日：毎週月・木 10：00～12：00
（夏季９：30～）

＊屋上庭園では市民の皆様の憩いの場となるように花と緑の空間づくりを行っています。ぜひ屋上にお立ち寄りください。

■広報プロジェクト

カフェ横の「コラボかわら版」や「コラボ新聞」を通じて、実行委員会の活動やコラボのイベントなどをお知らせしています。

また、千里を「知る・楽しむ」ための市民参加の「千里まち歩き」や「子育てマップづくり」も実施しています。実施日程は「コラボかわら版」や「コラボ新聞」､「コラボ市民実行委員会ブログ」でお知らせします。

ブログ：http://www.voluntary.jp/weblog/myblog/651

豊中市千里文化センター市民実行委員会

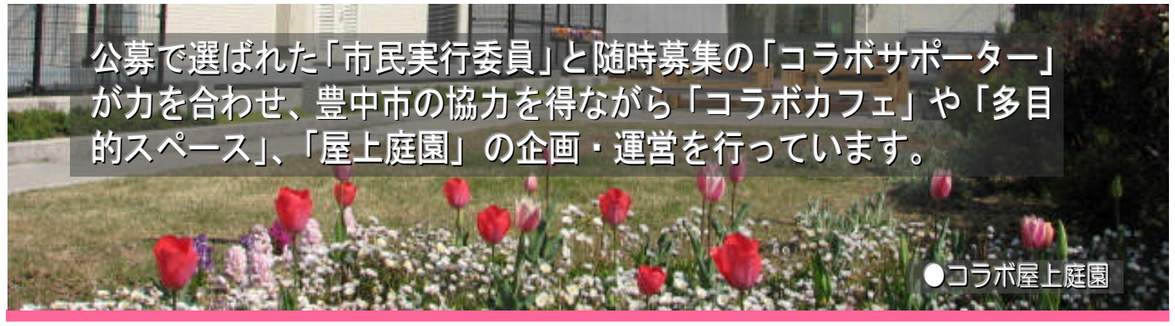
活動紹介

2014 年 10 月
豊中市千里文化センター市民実行委員会　広報プロジェクト

豊中市
千里文化センター
市民実行委員会

●「コラボ」は千里文化センターの愛称です。

公募で選ばれた「市民実行委員」と随時募集の「コラボサポーター」が力を合わせ、豊中市の協力を得ながら「コラボカフェ」や「多目的スペース」、「屋上庭園」の企画・運営を行っています。


●コラボ屋上庭園

多世代・多分野・多文化の共生

■コラボ交流カフェ
市民実行委員会のメンバーとカフェサポーターがボランティアで運営している喫茶コーナーです。千里中央の「北広場」を眺めながら、コーヒーや紅茶、ジュースを飲むことができます。

●オープン：火～土（10：00～17：00）
●定 休 日：月・日・祝
＊その他に正月休みや夏休みなどがあります。

■テーマ型交流カフェ
さまざまなテーマでゲストの話を聞いたり、市民同士が気軽に対話できる場を提供しています。

●外国の方たちとの交流の場「多文化カフェ」
●絵本を学び楽しむ「大人のための絵本カフェ」
●転勤族ならではの悩みを語り合う「転勤族カフェ」

■コラボ談話室～花信風～
15 分程度の話題提供をもとに、色んな世代で気軽に語り合います。

■住まいの相談
住まいに関する色んな相談に専門家が親身になってお答えしています。

■コラボヘルプデスク
外国人のための相談窓口やイベントを開催しています。

■市民活動相談
千里界隈の市民活動を紹介しています。

■つながるサロン
障害者やその家族のための相談・交流の場を提供します。

人と人・人と情報との交流

■コラボ大学校
市民の方たちに講師になっていただき、得意分野のお話をしていただくセミナーです。これまでに例えば、

●与謝野晶子の巴里便り
●色の力で彩りのある人生に
●人はなぜ音楽に惹かれるのか

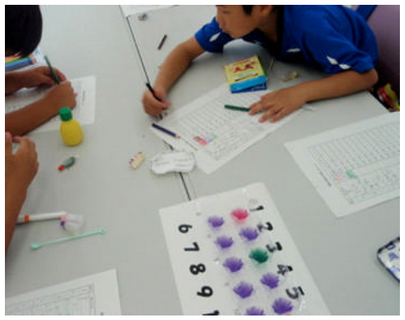
といった多様な分野の楽しいお話をうかがいました。現在、講師募集中です。

■ラウンドテーブル
地域の課題や活動事例を語り合う情報交換の場です。これから活動を始めようとする方も大歓迎です。

■哲学カフェ
初対面同士でも対話が可能であること、自分が人の意見で変容し得ることを実感する場です。

■実行委員会主催のイベントの様子（多目的スペース）

コラボおもしろ実験教室



親子コンサート

とよなか市民活動ネットきずな　ニュースレター
いろいろえんぴつ 18
発行：2010 年 10 月／特定非営利活動法人とよなか市民活動ネットきずな／ニュースレター編集委員会

千里文化センター（コラボ）における協働の事例

― 条例・制度の活用と市民活動 ―

コラボでは2010年4月から、市民が市と協働して多様な交流・学習の場を提供する事業を始めました。市民運営のカフェ・屋上庭園、テーマ型交流・学習の場（絵本カフェ、多文化カフェ、エコカフェ、哲学カフェ）、市民が蘊蓄を披露しあうコラボ大学校、市民活動情報共有の場（ラウンドテーブル）などです。「市民活動デビュー・フォーラム」の企画もあります。

ここに至るまでの経緯を振返って見ます。コラボにおける市民と市の協働を実現するため、市民は条例・制度を大いに活用しました。3つの段階があります。

① 2004年9月、市民が市に協働を提案する制度（市民公益活動推進条例・2004年4月制定）に基づき、「図書館の未来を考える会」が官民協働で千里文化センターの施設を計画することを提案、同年10月、市長が「貴団体も含め市民と意見交換ができる場づくりを行いたい。」と文書で回答しました。市民は、文化センター建替え計画について、市と意見交換する場がなく苦慮していたところでしたから、この回答は朗報でした。これを契機として、2005年9月、教育委員会が呼びかけ、市民も参加する「新千里図書館・公民館創造会議」が発足し、当初計画にはなかった屋内型広場「コラボ広場」、屋外型広場「屋上庭園」が提案され、大学の協力も得てこれらが実現しました。

② 2007年11月、市の施策の各段階への市民の参画を定めた条例（自治基本条例・2007年4月制定）に基づき、市民は創造会議において、コラボの運営に市民も参画することを提案し、2008年7月、市民運営会議が発足しました。

③ 自治基本条例に基づき、市民は運営会議において、協働における官民の役割などを定めるパートナーシップ協定の締結を提案、2010年3月、締結しました。

◇以下に感想を4点述べます。

1．市民が条例・制度を活用して協働を実現できたのは、活用に値する条例・制度が、丁度その頃、誕生したという幸運に恵まれたことによります。勿論、これを活用しようとする意欲が市民にあったことが前提ですが。

2．制度や条例を活用する協働は、時間がかかる。しかし根気よく粘れば、一定の成果が得られることを証明できたと思います。当初からコラボの計画に関わって来たものの一人として、いささかの感慨を覚えます。

3．VERBAL WORD DOES NOT WORK.（書いたものしか役に立たない）といいます。コラボの協働のありかたはパートナーシップ協定書という文書にしました。コラボの今後の協働に役立つ局面があるかも知れません。

4．以上の過程を見ると民と官の協働に3つの相があることに気付きます。字数の制約のため、ここは項目を示すのみに止めます。

（i）代議制民主主義の補完<政治システムの課題>
市民の参画する委員会などの創出とその場における協働（今後は議会への市民参画が課題）（＊参照）

（ii）官の専門性（縦割り）、民の縦割りの補完<行政システムの課題>
民民、官民、官官間の情報共有の場の創出とその場における協働

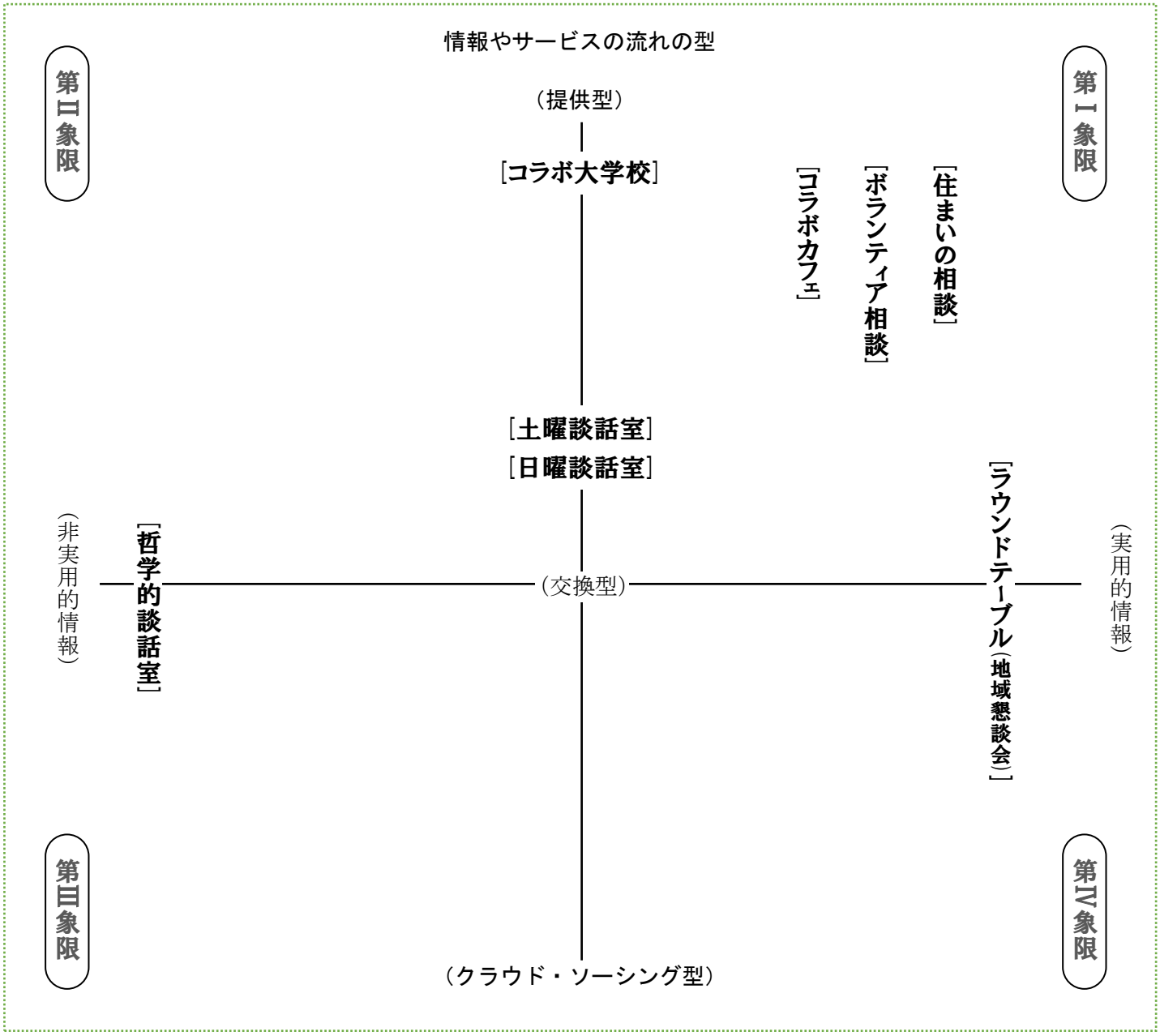
（iii）近接性の原則<財政システムの課題>
現場で資源配分を決定する場の創出とその場における協働

＊例えば、議会の政策能力を強化するために、議会のもとに学識経験者と市民委員からなる審議会を設置し、市民が議会へ参画する場を創出する必要があります。勿論、これに伴い議会事務局、議会図書室の充実・強化が必須になります。

きずな会員、コラボ運営委員
加福共之
tokafuku@leto.eonet.ne.jp

コラボ市民実行委員会諸活動の座・ポジション

１５０７１３　加福（150812 修正）



※縦軸の主語は実行委員（サポーターと委員が依頼した講師などを含む）であり、（提供型）とは実行委員が市民に情報やサービスを提供するということである。

※CROWD　SOURCING―不特定多数の人に呼び掛け、必要なサービス、アイデア、情報を得る事。（事例）①吹田市千里再生室は千里市民フォーラム等に呼び掛け、「ニュータウンを元気にした 50 のアイデア」展（14 年 11 月）を実現した。②豊中市千里文化センターはカフェの運営サポート要員募集を広く市民に呼び掛け実行委員と多数のサポーターによるカフェ運営を実現している。又、実行委員も文化センターの呼び掛けに応じて集まり活動しているのだからCS事例の一つとも考えられる。

※諸活動の名称は、正式名称でないものもある。これらの他にも、多数の事業・PROJECT 等がある。

「さたけん家（ち）」通信 vol.30　8月号

※この通信は、佐竹台小学校、佐竹台連合自治会のご協力を得て配布しています

お盆休みのお知らせ

さたけん家は、お子さんをお持ちのお母さんスタッフが多いため、8月12日(水)～19日(水)の間、長めのお盆休みをいただきます。よろしくお願いいたします。

佐竹台夏祭りのお知らせ

7月25日の佐竹台夏祭りでは、わらべ焼きやブルーリボンさんのカレーを販売します。1階のみカフェ営業もいたしますので、ぜひお越しください。

アンケートのおねがい

さたけん家や暮らしづくりについてのアンケートを実施いたします。いつもご利用いただいている方、一度も利用したこともない方、どなた様でも結構です。ご協力をお願いいたします。

アンケート実施期間：7月20日(月)～8月31日(月)。お1人1回とさせていただきます。

アンケートにご回答いただいた方には、お好きなドリンクをプレゼントいたします。

★『中学生レストラン』オープン★

7月21日(火)と8月4日の11～16時、
高野台中学校の家庭科クラブの学生さんが
『中学生レストラン』をオープンします。
温かい目で応援してください！

●ワードの基本講座●

開催日：　7月16・30日(木)の10～12時
受講料：1回1,500円(お茶付)
定　員：4名（定員になり次第締め切り）
※普段お使いのパソコンをお持ちください。
※お問合せ・申込み：satakedai.s.p@gmail.com

8月23日(日)11～16時は　さたけん家マルシェ

マルシェでは、地域の方が作られた、布製品、カゴ、陶器などの展示・販売を行なっています。
手作りが大好きな方、一緒に出展してみませんか？興味のある方はご来店・お問合せください。

グーチョキパン屋さんの

天然酵母・国産小麦の美味しいパンを販売します。

チャレンジショップは買って、美味しく食べて、
障がい者の方の収入に寄与できる取り組みです。

のんき屋

産地直送・新鮮青果

「のんき屋」さんが出店します！
地元野菜、無農薬野菜の販売もあります。売り切れ次第終了です。
野菜の美味しい食べ方なども教えてもらえます。

●写経カフェ　8月1日（第1土）

14～16時　参加費：300円
（クッキーセット付）
人気の教室です！
心穏やかになる時間です。

●はがき絵教室　14～16時

※8月の開催日はお問合せください。
参加費：300円(クッキーセット付)
描く時間をみんなで楽しむ

●編み物カフェ　8月8日(土)

14～16時
参加費：300円(クッキーセット付)
心がほっこり暖かくなる
時間です。

暮らしづくり通信 2

平成27年7月10日
佐竹台スマイルプロジェクト(SSP)実行委員会
トヨタ財団検証提言助成事業

こどもからおとなまで、
参加者大募集！

はじめの一歩を踏み出しませんか？

1人1人が自分に出来ることを、少しだけ持ち寄ったら、
きっと暮らしやすい町になると思いませんか？
自分に出来ることを出来る範囲でやってみることで、
自分もそして町の人も楽しく暮らせると思うのです。
まずは、参加してみませんか？　はじめの一歩をご一緒に。

1 ワカモノ会議 （学生のみなさんへ）

「ワカモノ会議」やっています！

まちづくりや人を楽しませることに興味のある高校生、大学生を募集します。
地域活性化の鍵は「よそ者」「わか者」「ばか者」と言われています。
佐竹台地区の「わか者」、佐竹台地区以外の「よそ者」、地区内外の「ばか者」、大募集です。
人をつなぐ、わくわくすることを考えてください。学校では学べない、大事なものが見つかります！

【イベント案内】
※詳細はFacebook、印刷物などで案内いたします。

●JOBCAFE　いろんな大人に会える時間

●8月11日(火)18～20時：JOB　CAFE
　牧大介さん×斎藤潤一さん
●8月30日(日)18～20時：JOB　CAFE
　世界おむすび協会×日本全国スギダラケ倶楽部

まき・だいすけ
農山漁村専門のコンサルタントとして各地で新規事業の企画・プロデュースを手掛けてきた。09年10月に株式会社西粟倉・森の学校を設立し代表取締役。

さいとう・じゅんいち
米国シリコンバレーのITベンチャー企業で製品開発責任者。宮崎県にIターン。外国人観光客誘致、海外販路開拓支援「日本の良さを世界に伝える」NPOまちづくりGIFTの代表

2 コアキナイプロジェクト

コアキナイ＝小商い
自分のやりたいことを、自分の手の届く範囲で、コミュニケーションをしながら行うヒューマンスケールを重視した、仕事のこと

好きなこと、得意なことで小商いのすすめ

まちづくりに興味がある、自分自身のスキルアップをしたい、プチ起業をしてみたい、
との思いをお持ちの方、さたけん家から初めてみませんか？
コアキナイ講座・講演会、交流の場などを開催していきますので、ぜひご参加ください。
タイムリな一告知はFacebookをチェックしてください。随時更新していきます。

●ワンデイシェフ(1日店長)

料理が好きな方、人と話すことが好きな方、いつかはお店を出してみたい方などにぴったりの
有償ボランティアです。年齢不問。資格不要。ご家庭でご飯を作っている方ならどなたでもOKです。
ワンデイシェフの皆さんが地域の居場所を支えています。ぜひあなたの力を発揮してください。
お1人でもグループでもご参加いただけます。
*小さなお子さんをお持ちのグループは、保育や幼稚園のお迎えをサポートしあっています。
*グループの商品販売なども行っていただいてOKです。
*少し大きなお子さまでしたら、お子さまと一緒に、ご家族での参加もOKです。
[きまりごと]
　●500円ランチを提供していただきます。スイーツは任意です。
　*1食あたり50円を、光熱費としてお店に入金していただきます。ドリンク代はお店に入金。
*スイーツは作れない場合は、お店のオリジナルスイーツを用意していますので大丈夫です。
●450円×提供食数がその日のスタッフのお持ち帰り分です。

●マルシェに出品・教室の開催

毎月第4日曜日に開催しているマルシェなどで、
ご自身の作品を展示販売をしていただけます。
[きまりごと]
●ご自身での販売で1割、委託販売で2割の販売手数料をいただいています。出店料は不要です。

【イベント案内】

●元気がもらえる！女性応援座談会(3回シリーズ)　*トヨタ財団助成事業

お仕事になるまでの経験談とワークショップ・講座が一緒になったお得で楽しい座談会を開催します。
少人数制ですのでお早めにお申し込みください。参加費：各回1,500円

●8月28日(金)10～12時　講師：ライフオーガナイザー若井峰子さん
　『気づきからはじまったお仕事』の話 ＋ 収納相談　（ドリンク付）
　「キッチンからはじまる整理術」講座が好評の若井さん、きっかけは“子育てのしんどさ”でした。
　そんな若井さんのお話と収納の相談が一緒になった座談会です。　定員8名

●9月11日(金) 10～12時　講師：北摂てづくりの会代表　USAGIGUMOさん
　『好きを形にしたお仕事』の話 ＋ レジンで作るイニシャル入りペンダント　（ドリンク付）
　ご自身が辛い時に、「そんな時こそ誰かのために動いてみたら」と背中を押され、「作り手」たちが輝ける場所を提供するハンドメイドコーディネーターとして活動するようになられた、USAGIGUMOさんのお話と、透明樹脂で作るレジンのワークショップの座談会です。　定員8名

●10月2日(金) 10～12時　講師：珈琲焙煎インストラクター　村田一恵さん
　『興味からはじまったお仕事』の話 ＋ 自家焙煎との味くらべ
　授乳中やこどもでも飲める珈琲があることを知り、珈琲焙煎インストラクターになった村田さんのお話と、実際に焙煎を体験し、飲み比べていただけるワークショップの美味しい座談会です。　定員8名

3 コミュニティプログラム

【イベント案内】

●「おとなの寺子屋」を学んでやってみよう！

日々の生活は、まずは心身ともに健康であることが大事ですよね。
気力体力を維持、増進のための「おとなの教室」です。
それって、何するの？と思われると思います。まずは、そこをみんなで学びましょう！
居場所づくりで、様々な賞を受賞されている、NPO法人ハートフレンドの徳谷さんを講師に迎えて、
実践されている「おとなのてらこや」を学びます。ぜひご参加ください。

●徳谷さんに学ぶ「楽しいおとなのてらこや」

日　時：7月27日(月)10～12時
参加費：無料(トヨタ財団検証提言助成事業)
申込み：電話での申し込み　06-6871-7557(さたけん家)
　　メールでの申し込み　satakedai.s.p@gmail.com

●「ナンシー関」を語ろう！　本のサロン@さたけん家第1回企画

消しゴム版画、記憶スケッチアカデミー、そして抜群の切れ味のコラムで私達を魅了してくれたナンシー関について語る会を開きます。「このコラムがベスト」「あの版画が最高」「こんな芸能人いた」。時代を描きつくした国民的コラムニストについてあれこれ喋りたい方，興味を持った若い方，お待ちしています。
日　時　：　8月29日（土）14～16時
主　催　：鈴木毅（近畿大学建築学部教授。「人の居方と街の場所」研究者）
申し込み・問い合せ：　t-suzuki@arch.kindai.ac.jp鈴木毅まで
関連展示：　さたけん家カフェにナンシー関の単行本約30冊を展示します。
　　お茶を飲みがてら読みにきて、当日にお備えください。

●「コミマン（コミュニティマージャン）」大会！

1.8メートル角のテーブルと高さ10センチのパイを使って行う、
大人数でわいわい行うマージャンです。募集人数子ども24名、大人24名。
10～12時子ども大会、13～15時おとな大会を行います。
講師は「あそびの工房もくもく屋」田川雅規さん
日　時：8月30日(日)10～15時
参加費：無料(トヨタ財団検証提言助成事業)
申込み：電話での申し込み　06-6871-7557(さたけん家)
　　メールでの申し込み　satakedai.s.p@gmail.com

いずれのプログラムも
お席があれば、
当日参加OKです。

主催：吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議

共催：豊中市千里地域連携センター